
リリカルなのは 最低なトリッパーの日々

交わらない世界

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは 最低なトリッパーの日々

【Nコード】

N3378Z

【作者名】

交わらない世界

【あらすじ】

最低な主人公がとりあえずなにも考えず原作崩壊させたり楽しむ話

シンプル(笑)な能力

神様トリップしました。

いやー素晴らしいものですね、もらった特典は創造です。

すごいですよこの能力は生命以外なら何でも作れるらしいです。

あ！ちなみにトリップした先はリリカルなのはの世界です。

「周り荒野とか、どんだけ敵しんだよ神様wwwwww

原作の面影もねーよwwwwww

とりあえず、家を建てとくかwwwwww」

リリカルなのはは次元世界つてのがあからその中のどれかだ
ろうなこの世界は。

まあ、テンションあげていきましょう。

それにしても、家か、どんな家建てよう？

まあ、無難にログハウスでも作っておこう。

「チヨチヨイのちよいつと」

中は結構普通に作った。

地下も作っておいたぜ！ 地下は空間を歪めてだだっ広い空間を
作った。

地下牢とか欲しかったけど自重したんだぜ！

「さて、家も作ったし次はどうするかな」

うーん、そうだな能力を作るか！」

俺がもらった創造の能力は生命以外、何でもつまり能力だろうと
何だろうと作れてしまうのだ！！

さて、そうと決まればどんな能力を作るか……シンプルに行くべきか。

そつだなそれじゃあ、絶対防御ぐらいでいいか。

内容はあらゆる危険な事象を防ぐでいいな、これこそシンプル！
かつこ良く（笑）能力を決めた所で能力を試してみよう。

まずは近くにある土を生贄（素材）にして！ 大岩を召喚（作成）！！
そしてそれを俺の真上から落とす。

大岩は俺の20cm上で止まり見えない壁に衝突したようだ、見えない壁に衝突した大岩にヒビが入り割れる。

俺の周りには大岩の破片が転がっている。

どうやら俺を中心に半径175cmの球状の障壁ができています。
しい。

「ふむふむ、なかなか頑丈だな」

それじゃあ、次の実験言ってみよう。

次は近くの土を生贄にいくつかの石の槍を目の前に召喚、障壁の中から攻撃だ！

石の槍は服にあたり動きが止まる、服に沿うように障壁が張られているようだ。

肌が露出している部分、手や頭などにも石の槍による攻撃が当たるがやはり止まっている。

肌に沿うようにも障壁が張られているようだ、何段重ね何だろう？

その後も結果をはってその中の酸素をすべてなくすという方法を使ったりいろいろな方法で実験をした。

「ハッハッハッハッ、ちょっとやり過ぎちゃったんだぜ ミ」

周りはやばいことになっている、溶けたり凍ったり変なガス出

してたり、最終的には太陽の中に入っても大丈夫ってわかったぞw
www

「チヨチヨイのちよいつと直して、絶対防御以外の能力は封印つと」

封印したのは土を大岩にしたりした錬金術とか太陽に移動した時に使った瞬間移動とかだ。

「実験も終わったし、もう夜だし、今日はこれで終わりにして寝るか！」

俺はそう言うと、家の中に入りベットに潜り込み寝た。

拾ったのはボロ雑巾のようなもの

トリップ2日目、この星のことを調べたが俺以外人間が存在して
なかったwww

てことで、この世界を中心にしているいろんな世界に行ってみよう
と思う、今はまだ原作前だし。

原作まで12年といったところか、まだ主人公も生まれてないな
www

「どんな世界に行こうかな、やっぱり命の軽い世界がいいかな、奴
隷とか普通において人権がない世界……よし！ その設定で探そう」

そして、条件にあった世界を探す魔法を創る。

「結構あるな、まあ世界が無限に広がっているようなものだし当た
り前か、管理局が介入している世界はちよつとずつ人権とかの意識
がされているな

それでも奴隷なんかは居るみたいだが」

急速に世界を変えるのは難しい、そういう事を管理局も理解して
いるのだろう奴隷自体も禁止されているがある程度は見逃されてい
るらしい。

「まあ、管理局が介入してる世界には行かないけどな、それじゃあ
移動っ」と

「移動完了、それじゃあ適当に歩きますかね」

うむ、ひどいな浮浪児がたくさんだぜ！　そこかしこに汚物があるし汚い。

どうやらこの国は戦争中で最近負けが多いそうだ、戦争孤児などもいるからこの状態っと。

「よりどりみどりだな、ここは定番通り恩に着せて忠誠を誓わせるか」

俺は適当な裏路地に入っていく、すぐに不快な視線を感じたが魔力光を纏う、この世界では魔法は貴族しか使えないらしい。

つまり魔力光をまとっていると変なのが寄ってこないのだ！　その証拠にこちらを狙っていた奴らは速攻で逃げていったしな。

「見つけた、もうこれでいっかwww」

それなりに顔が良くて、使えそうなのを探してたんだがなかなか見つからないしボロ雑巾のように道端で死にかけてるけど、これにしよう。

「おーい、生きてるよな？　うん、大丈夫だな、今日からお前は俺のモノだ！」

誘拐犯上等で相手の許可を取らずに抱え、家のある世界に転移する。

ご主人様のために頑張れ

少女を誘拐してきて1ヶ月wwww

めっちゃ懐いてます、いやー、連れてきて目が覚めるまで世話をしてたんだが、目を覚ました少女は初っ端から俺を父親扱いしました。

記憶がないのかそれとも最初からこんなのははしらないが父親じゃなくてご主人様だと教え込みましたがwwww

甘えん坊さんなんですがね、とつても優秀です、教えたことは大抵すぐに覚えるし、従者として申し分ないな。

「ご主人様、もう新しい魔法覚えました、褒めてください！！」

そう言ってぴったりと張り付けてくる白亜^{はくあ}、ちなみに白亜は少女の名前だぞ！

最初はボロ雑巾のようだったが、どうにか綺麗にしてかすり傷とか小さな傷もきれいにしたら肌は結構白くて綺麗だったから白亜だ。安直な名前だがこんなもんだろう？ 感覚的に捨て犬や捨て猫に名前をつける感じでつけたけど。

「ああ、よく出来たな白亜、これで広域殲滅魔法も覚えたし、次は次元跳躍魔法と次元世界移動の魔法を覚えたらいろいろ回ってみるか」

「はい、ご主人様、白亜は頑張ります、だから、だから、捨てないでください……」

そう言って抱きついてくる白亜、今俺に捨てられたとしても一人でいきていけるぐらいにはなっているのここまですごいとは、人

問ってのは一度得たものをなくすのはやっぱり怖いんだなwww
「きちんと覚えれば捨てないさ、本当は半月と言いたところだけ
ど、あと1ヶ月でどちらとも覚える、いいな？」

「はい！ 絶対に覚えます、ご主人様！」

実際には次元跳躍魔法と次元世界移動の魔法を1ヶ月で覚えるな
ど正気の沙汰ではない、次元跳躍魔法などどれだけ才能があっても
5年はかかる。

それに次元世界移動を行うなど普通は不可能とされている、次元
にも距離といったものがありその距離を無視して移動することなど
できたら次元航行艦はいらないからな。

まあ、そんなものを1ヶ月で覚えられるのは俺が少し、弄っ……ゲ
フン、ゲフン、調整したからだ。

でもそこまでチートなわけじゃない、結構デバイスがサポートし
ているしデバイスがなければかなり才能がある魔導師といった程度
だ。

「ああ、頑張れよ期待してる」

「はい、絶対に期待に答えて見せます！！」

「グノーシス、セットアップ」

私はご主人様から頂いたインテリジェントデバイスであるグノー
シスを起動させる。

周囲がほのかに光、私はバリアジャケットをまとい、手の中には
本が現れる、起動状態のグノーシスです。

『セツトアップ完了しました、マスター』

ちなみにグノーシスは待機状態はスケルトンキーという種類の鍵です。

鍵穴に当てればどんな鍵だつて開けられるというおまけ付きらしいです、使ったことはありませんが。

グノーシスの性能は管理局と呼ばれるところにある無限書庫と呼ばれるデータベースをすべて記録してありなおかつ全てを整理、理解して、さらに編集するほどらしいです。

「うん、グノーシス、次元跳躍魔法と次元世界移動の魔法についていつもどおり頭に直接送って」

『それは危険です、マスター、情報量が多くそんな事すればマスターがただではすみません
ですのでどちらか一つにしてください』

心配そうにそういうグノーシス、でも私はご主人様の期待に答えたいのです。

「グノーシス、お願いします時間が無いのです」

『マスター、もうおやめくださいあの男に従う必要などないので
あの男は調整などといいマスターの体を弄り回し、ろくな事
しません、私の知識があればあの男から離れて体をもとに戻す
ことも可能ですし、ですか』

「グノーシス、貴方でもご主人様を侮辱するのは許しません、貴方は私のために作られた存在でしょうが自分を作ったご主人様を侮辱

するとはどういうことですか」

『マスターのために作られたからこそです、あの男はマスターなど
どうでもいいのです、このままでは壊れるまで使い潰されますよ！』

そんな事、そんな事！！

「知っています、どうせ私などそこらに捨てられるゴミと変わりが
せん、少なくともあそこではそうでした」

あの地獄のような場所、力なきものから死んでいくあの場所では
私などゴミでしかありませんでした。

「私はご主人様の所有物でいいです、そばに居られればそれでいい
んです……使い潰されるなら本望です」

もう、いいでしょう早く情報を送ってください」

『マスター……分かりました、絶対に耐えてください……クリエイ
ターのために』

「当然です、私はご主人様のために絶対に耐えます」

そして送られてくる、膨大な情報量、頭が痛い、だがそんな事を
無視して送られてきた情報を分析する。

メリット・デメリット、出来る事と出来ないこと、消費魔力、術
式に詠唱短縮方法、さらに無詠唱での発動。

グノーシスにより整理、編集されているというのにそれでもかな
りの量の情報です。

ですが耐えます、耐え切ってみます、ご主人様の調整された私に
不可能はないのですから。

「どうにか……耐え、きれました」

『無茶をしましたねマスター、あれから3日たちました』

3日ですか、予想の範囲内ですね。

「では、テストを始めますよ、実際に使ってみなければ分からないことのほうが多いのですから」

『分かりました、それではテストケース1、次元跳躍魔法使用時の術者への攻撃対処から行きましょう』

そして、1ヶ月後には見事に次元跳躍魔法、次元世界移動の魔法を習得しました。

神様ごっこがしたい！ ついでに闇の書も回収作戦、別にクロノの父親を助け

原作11年前、確かクロノの父親が死ぬ年だ、ちよつと前に闇の書の主が捕まったらしい今は輸送中とか、どうしようかな、助けようかな？ 助けまいかな？

神様ごっこでもやってみようwww

「というわけで、助けよう」

「突然どうされたのですか？ ご主人様？」

突然俺が声を出したので白亜が不思議そうにそう聞いてくる。

白亜は俺が拾ってからつまり9歳の時点の体から成長していない、これは主人公組に混ぜようかなと思っっているからだ。

まあ、栄養失調などで死にかけていたわけだから平均よりかなり小さいのだが9歳だ、いや、今は関係ないな。

「うん？ いや、闇の書つてのを知っているか？」

「知っていますが、それがどうかしたのですか？」

「欲しくなったから貰いに行く」

いや、実際には神様ごっこがしたいだけなのだが、ついでに貰うぐらいいいだろう。

「そういう事ですか、分かりました、輸送しているのは確かエスティアという艦船でしたね、それでは、ん？」

「どうかしたか？ 白亜」

「はい、どうやら闇の書が暴走しているようです」

うむ、時間がないようだ。

「白亜、お前は俺の指示通りに動け」

「はい、ご主人様」

「ここまでか……」

すまない、リンディ、クロノ、俺は帰れそうにない……

もうじきこの船はアルカンシエルにより消滅するだろう。

「チーツス、神です、助かりたくありませんか？」

なんだ？ 子供？ なぜ子供がこんな所に？

もうじき艦船と共に消滅するだろう俺の前に現れたのは仮面をした少年だった。

「逃げ、るんだ、アルカンシエルが、来るぞ！」

「逃げる？ なんで？」

ほんとうに意味が分からないという顔をしてそういう仮面の少年、ノイズ混じりのモニターには今まさにこちらにアルカンシエルが放たれた映像があった。

「む、豆鉄砲か？ まあいいか、それよりさっきの話の続きだ助かりたいか？」

信じられないことが起こった、アルカンシエルがこの艦船に直撃する前に弾かれたのだ。

今の言葉からするとアルカンシエルを弾いたのはこの少年だろう、それにしても助かりたとは

「どういう、意味かな？」

「うーん、まあ、いわゆる俺は全能の神様なわけだよ、で、暇だったからなにかないか探してたら闇の書ってのがあったから欲しくなって貰いに来たんだけど死にかけの人間がいたから助けてみようかなとか思ってたわけ」

全能の神様か、少し信じられないけどアルカンシエルを豆鉄砲扱にする人物だ、それにしても闇の書が欲しくなったから貰いに来たとは。

「闇の書は諦めてくれないか、アレは危険なものなんだ」

「い・や・だ、欲しいから貰っていく、それから面倒だからあんたは助かりたいという事で」

パチンパチン、少年は指を二回鳴らす、すると俺の傷が瞬く間に治り、次の瞬間には地の底から鳴り響くような音がしたと思ったら静かになった。

「傷は治したし、闇の書は封印できた、次は船の修理か」

少年がパチンと指を鳴らすと瞬く間に船が直った。

「さてと、闇の書も回収できたしそれじゃあね」

「な！ 待つんだ！！」

俺は叫んだがその間に少年は消えていた。

これが次元世界で指パッチンの神様と呼ばれることになる少年との初めての出会いであった。

闇の書、そして原作崩壊

「ただいま、白亜、闇の書は？」

「はい、こちらです」

神様ごっこがしたい！ ついでに闇の書も回収作戦、別にクロノの父親を助けたのはついでなんだからね！ 勘違いしないでよねっ
！

では白亜には闇の書の回収をしてもらった。

「うんうん、うまく封印できてるな！ それじゃあ、パパっといじってみよ……うっ？」

「どうかしましたか、ご主人様？」

「うん、アレなに？」

なんか知らないけど女の人が転がっている。

「ああ、アレですか？ 闇の書にくっついていたのでそのまま持って来ましたが、そこら辺に捨ててきましようか？」

あ、多分今代の闇の書の主だろう、まあ、気絶してる間にいじろう。

「捨てなくていいよ、たぶんまだ使い道があるから」

「分かりました」

それじゃあ、まずは結界を張って、っと、結界が張れたら闇の書から闇を取り出して結界に弾き飛ばす。

結界の中でドロドロした黒いのが蠢いているが気にしない、闇の書、いや、闇はなくなつたし夜天の書でいいか、夜天の書の管理者権限を取得する。

そして、少し設定をいじる。

「よし、神野^{かみの} 創^{そう}の名のもとに起動しる夜天の書」

そう言つて俺が夜天の書を起動させると夜天の書はひとりでに浮き上がりページがバラバラとめくれる。

それが終わると四方に光の柱が立つ。

「我ら、夜天の主の下に集いし騎士」

光の柱の中からは4人の女性が現れた。

まずはピンクの髪をした女性、剣の騎士シグナムだ。

「主ある限り、我らの魂尽きる事なし」

緑の髪の女性が言う、湖の騎士シヤマル。

「この身に命ある限り、我らは御身の下にあり」

次は青い髪の凜々しい女性がいう、盾の守護獣ザフィーラである。

最後にいじつた設定はザフィーラの性別だwwww

無茶苦茶美人になつてやがるwwww

「我らが主、夜天の王、神野創の名の下に」

最後は赤い髪の少女、鉄槌の騎士ヴィータだ。

「うん、起動にも問題なし、それじゃあ管理人格の方も呼び出しておいっ」

そうやって俺は指を鳴らす、すると夜天の書のページが勝手に埋まっていく、全部埋まった所で本が光る

「さてと、夜天の主の名において汝に新たな名を贈る、偉大なる術、大いなる秘法、王者の法、アルスマグナ」

夜天の書がひときわ強く光る、そして正面に光の柱が立つ

「夜天の書の管理人格、アルスマグナ、主ソウの呼びかけの下に」

光の柱から出てきたのは長い銀髪と深紅の瞳が印象的な若い女性、本来ならリインフォースと呼ばれる女性だ。

「これで全員だな、みんなよろしく」

「シグナムです、主ソウ、よろしくお願いします」

「はい、ソウ様、私はシャマルです、よろしくお願いします」

「ザフィーラだ、主よ、よろしく頼む」

「ヴィータです、よろしくお願いします、主ソウ」

「主ソウより頂いたこの名前大切にしたいと思います、よろしくお

願います」

地面に片膝をついたまま名乗るヴォルケンリッターとアルスマグナ。

それにしてもみんな堅いな、まあ、アニメでもハヤテと一緒にすごしていくうちにあんなになつたていつてたしこんなもんか。

これでA・Sでの闇の書事件がなくなつたなStrikerSでの機動六課設立もなくなつたかも、どうしよう？

シンプル（笑）な能力などなかったのだ、指パッチンの神様と思わぬ伏兵

なんやかんなで2年後、主人公が生まれる年になりました。
原作9年前です。

「ソウ様、今日はなにをしてきたんですか？」

そう聞いてくるのは元闇の書の主であった、ファクターだ、ちなみにクーって呼んでる、クーは目覚めた当初説明したら暴れてこの世界から出せとかいったから。

元の世界に帰ったとしたら、自分の命惜しさに人を殺してしかも、今までの闇の書の主がしてきたことでかなり恨まれているのにこの世界から出ていきたいの？ と聞いたらむしろここに居させてくださいと懇願されたのでそばにしている。

それから2年で結構懐いてくれた、初めてももらったし、あ！もちろん白亜のももらったよ！！

「うん、指パッチン教とかいうふざけた宗教の神殿を潰してきただけだよ」

俺はそう言って、椅子に座っているザフィーラの膝の上に座る、ザフィーラってさ老連っていうか落ち着いてるからなんだか落ち着くんだよな、もたれかかったら胸が柔らかいし。

『クリエイター、ドンマイですね、早く死んでください』

相変わらず口が悪いなグノーシス。

「グ、グノーシス、ご、ご主人様申し訳ございません」

「……別にいいそいつの口が悪いのはいつものことだ、それよりも指パッチン教の奴らだ、アイツら俺を指パッチンの神様とか言っただけで適期的に作りやがって馬鹿にしてやがる！」

「そいつは仕方ねーんじゃねえのか？ ソウはいつも指パッチンでなんでもするからそう見えるだろ？」

「そういう問題じゃねえよ、ヴィータ、指パッチンの神様なんて、なんかよくわかんないけどすごく指パッチンが出来る人みたいじゃないか！！」

「それでしたら、降臨するのをやめればいいのではないですか？ 主ソウ」

「降臨？ どういう意味だ、アルス？」

「もしかして、気づいてなかったのですか？ 2ヶ月に1回できる指パッチン教の神殿は主の降臨祭の会場ですよ？」

「なんだそれ？ え、もしかして、あれか、怒らせて神様降臨てやつか？」

「ソウ様は慕われていますからね、それよりも今日の料理はどうしますか？」

「そういうのは、シャマル、俺専用の料理係だ、ほら俺はメシマズでも美味しく食べられる能力とか作れるから、それで忠誠度が上がったたりしたけど。」

「くっそ、もう今度からつぶしに行つてやるものか!! アイツ
らマジフザケやがって! それからシヤマル、料理は唐揚げで頼む」

はぁい、と返事してキッチンへと向かうシヤマル。

「シヤマルの料理ですか、今度はなにが……、いえ、今は関係ありませんね、主ソウが望むのなら私が関係者を切り捨ててまいりましょう」

「いや、いいよ、シグナム、それにしても祭りか……、2ヶ月に1回は多いな、1年に1回にしてそれから適当に無人世界を使って神殿でも立ててそこですることによろ」

「そうだな、主の負担を少なくするにはそれが良い」

そう言つて、俺の頭を撫でるザフィーラ、やっぱりザフィーラっていいやつだよな!!

私は主の頭を撫でながら考える。

今のところ私は主に多大に信頼されているだろう、ある時、元主であるファクターと白亜から主の濃い匂いを感じたときは、したくなつたが、我慢した。

ファクターはともかく私では白亜に勝つことは不可能であろう、それにいくら憎いからといってファクターを、せすれば主は悲しむだろう。

幸いにして、主はまだヴォルケンリッターには手を出していない、だからヴォルケンリッターでの主の一番を私が手に入れるのだ!!

光源氏計画（前書き）

前話の投稿0時と12時を間違えてた。

光源氏計画

原作4年前、公園で泣いている5歳のなのは発見しました。

ちなみに俺は15歳くらいで高町恭也と同じ高校に通ってる、あ、そつえば将来、恭也と恋人になる月村忍をとつたけどいいよな？
いや、中学が同じだったんだが、卒業の日にあんなに盛り上がる
とは。

まあ、今は関係ないな、今はなのはと仲良くなるのが先決、やっぱり魔法の師匠的ポジションから攻めてみよう。

「こんな所で泣いてどうしたのかな？」

「ふええ！？ な、泣いてなんかないの！」

「うん？ そうか、それは悪かったな、もう結構遅い時間だぞ、そろそろ家に帰ったほうがいいじゃないか？ 家族が心配するぞ？」

まあ、実際には翠屋がまだ開いているので家にだれも居ないことを知っているんだけどな。

「そんな事ない、誰も心配なんてしない……」の

ふむふむ、落ち込んでしまった、まあ、ちょっとそこにつけ込ませてもらおうかな、最低だけど気にしない、それが俺だからWWW

「心配しないとは、なにか訳ありのようだね、お嬢さん、良かったら相談に乗ろう」

俺がそう言うと、なのは、は最初の方はためらっていたがぼつり

ぼつりと事情を話し始めた。

まあ、まとめると父が事故で入院していて、母は喫茶店で忙しく、兄姉は看病と家業の手伝いで、彼女は家で一人ぼつちのことが多いということだった。

「そっか、それは寂しいね、じゃあ俺と友達にならないか？　なのは」

「と、友達？　いいの？」

ためらいがちに聞いてくる、うんうん、可愛いね。

「いいよ、俺がなろうって言ってるんだ、なのはが決めればいい」

「じゃあ、な、なのはと友だちになってください！」

「おう、それじゃあよろしくな、なのは」

「こちらこそ、よろしくなの、創お兄ちゃん！」

元気だね、まあ、これで楔は打ち込めたからここから楽しい楽しい光源氏計画発動だwww

どんなふうに着つかない、すっごく楽しみだwww

「まあ、せっかく友だちになったんだし、なのはに俺の秘密を教えてくださいろ」

「秘密？」

「そっか、実は俺は魔法使いなんだ」

「ふええ！？　そ、それ、本当なの！？」

魔法のことを教えておく、それにいま教えておけば御神流が手に入るかもしれないし。

それというのも、なのはの運動音痴を直せるかもしれないからだ、どうやら運動音痴の原因は不安定な魔力で時々される無意識での身体強化のせいのようなからだ。

まあ、そのせいで体の動かし方が安定しないんだろう。

「じゃあ、証拠を見せてやろう」

『割れないシャボン玉』

使った魔法はシールドの最低バージョンだ、一応オリジナルになるのかな？

「わわっ！　これが魔法なの！？」

「まあ、すごく簡単な魔法だけだな、もっとすごいことできるけどここじゃあ目立ちすぎるからな」

「な、なのはも魔法は使えるの？」

うまく魔法に興味を持ったみたいだな。

「使えると思うぞ、使いたいのか？」

「使いたいの！ー！」

「それじゃあ、リンカーコアの活性化をしようか」

リンカーコアの活性化自体は、デバイスがあれば勝手にしてくれるのだが今回はないので俺がやる。

「リンカーコア？」

「あー、リンカーコアってのは魔力を扱うのに必要なものだと思う
てくれ、それじゃあ行くぞ」

俺はそう言っつて、なのはのみぞおち辺りに手を当てる、そして魔力を少しだけ流しなのはのリンカーコアを刺激してやる。

「ふえ、なんだか体がぼかぼかしてきたの、それに体が軽いの」

「魔力が多いね、なのは、安全のために制御用の魔法をかけておくから、それで感覚を掴むといい」

「変な感じなの」

「体に魔力を馴染ませるために少しだけ魔法を使ってみようか」

その後は簡単な魔法を教えた、天才つてやっぱ居るんだな少し教えただけですぐに使えるようになったし、今日はもう遅いのでそれで終わりになった。

明日は日曜日なので早くから遊ぶ約束をしてわかれた。

10,000PV記念、とある日の

をかけた訓練光景(前書き)

ホントは5,000PV記念だったんだけどね、いつの間にか倍になつてたよ!!!

ホントにびっくり!!!

「アクセルシューター！！ 最大速度なの！！」

『アクセルシューター』

なのはが誘導操作魔力弾であるアクセルシューターを放つ、その数は多く対象者を360度全て囲むほどだ、200個以上はあるだろう。

「なかなか多いですし速いですね、ですが邪魔なので撃ち落させてもらいます、行きますよグノーシス、迎撃システム、イージス発動！」

対する私は迎撃システム、イージスによって全てのアクセルシューターを撃ち落とす。

あたりは魔法同士がぶつかり合った魔力反応で煙に包まれている。

ヒュッ、ビュンッ

煙に紛れて刀が振るわれる、今のは確実に殺しに来ましたね、まあ、実戦であれば声を出さずに殺しに行くのは当然ですか。

「あ、惜しかったのに、もう少しでその首が獲れたんだけど、うふふふ」

「怖いことを言いますね、すずか、とりあえず吹き飛びなさい」

そう言って、私はすずかに蹴りを入れます、刀で防がれましたか、

地上にクレーターができていますがダメージはなさそうですね。

『マスター、広域攻撃が来ます、おそらくデアボリック・エミッシ
ョンです』

「む、はやてですか、厄介ですね、グノーシス、はやての後ろに転
移してください」

『テレポーターション』

一瞬のうちに景色が変わり、私ははやての後ろに転移しました。

「やっぱり来た！！ これで終わってください、ハーケンスラッシ
ュー！！」

フェイトですか、まさか待ち構えているとは、ですが声を出すの
はいただけませんね。

「これは、油断しましたね、ですがその程度では」

「あははは、私を忘れてもらっちゃー困るよー！ ジェットーお
おおおおお！ ザンバーあああああああ！！」

アリシア！！ というよりどれだけ魔力を込めているんですか！
！ これは少しヤバイですね。

ドッゴーン！！ と落ちて大きなクレーターを作る、白亜。

「あははは、やっぱり私って最強ね、それにしても死んだかしら？

いや、そう簡単に死ぬわけないか」

私は白亜が作ったクレーターを見ながらそういう。

「お、お姉ちゃんやり過ぎだよ！」

「いや、アレぐらいしないとダメージ通らないって、まあ、死んでくれたら儲けものかな？」

心配性すぎる妹にそういう、まあ、私としてはかなりのダメージを与えたと思うけど。

「お姉ちゃんなに言ってる、え？ つ！！！」

「ん？ どうしたの、フェイ」

「今のは危なかったですよ？ 右腕がイカれました」

そう言ってる、無事な左手で私の頭をつかむ白亜、あー、これはやばいですね、ええ。

「いや、別に殺そうなんてしてないよ、ほんとだよ！！ アリシ
アウソツカナイ！」

「大丈夫ですよ、殺しません、少ししびれているせいで力加減を間違つかもかもしれませんが殺しませんから、死なないてくださいね？」

あ、これ死んじやうかも、私また死んじやうかもしんない！！
ドッガンッ！！ と音がして私は地面に、いや、岩に叩きつけられた、バリアジャケットを着ているといっても死ぬほど痛かった。

「きゃあああああああ！！！！」

「え？ 嘘、だめだよ、なんでそんな速度で近づいてくるの？ フェイト、いくらお姉ちゃんが好きだからってそんな速度で近づいてきたらお姉ちゃん死んじゃ」

そして、私はフェイトと熱い抱擁を交わして気を失った。

「ふう、これで2人脱落ですね、後4人ですか、これは本来バトルロワイヤルのはずなのですが、まあ、いいでしょう」

私は他の6人に比べて強いですし、問題無いですね。

『シールド』

グノーシスが魔法を発動したと思ったら、ガッキンツと大きな剣とシールドがぶつかり合った。

「くすくす、人間は不便だね、怪我をしてもすぐに治らないし」

そういうのは、さっきの刀とは違い3mはあろうかという大剣を持っているはずかだ。

「驚きましたよ、ほとんど気配を感じなかったのですが、それにしてもさっきといい今といい手加減がありませんね」

「ええ、だって、手加減して勝てると思いませんから、だから殺す気なんですよ？ どうせ、届いたとしても重症を負わせる程度でし

「よう？」

「ふむ、重症を負わせること前提ですか、やはり怖いですね、一応この右腕だって重症なのですが？」

「私が死んだらご主人様が困ると思うのですが？」

「ご主人様が困ることなんてあるんですか？ 必要だったら死んでも生き返らしてくれますよ、うふふ」

「ガツキンツ、ガツキンツとシールドを叩き続けるすずか、シールドを保つだけで精一杯ですね。」

「すずかちゃん、ごめんなの、すずかちゃんの犠牲は忘れないの」

『スターライトブレイカーXXX』

「下からなのはが現れ、ありえなほどの魔力を収束していく、いくつものスフィアが収束した魔力の周りに出来上がる、XXXですか最大威力ですね、まあ、好都合です。」

「収束した魔力を中心にスフィアの魔力が絡みあい理不尽な程の魔力が迫ってくる。」

『シャッフル』

「ふえ？」

「テレポートが出来るのですから、相手との位置を変えることくらい朝飯前ですよ？」

「にああああああ！……！」

「きゃあああああああ！……！」

私となのはの位置が入れ替わり、なのはとすずかが落ちて行く、呆気無いですね。

『マスター、フレースヴェルグ……：来ます！ 回避不可、シールド展開……：マスター、対シヨック……！』

「くっ！！ やって」

「はやてちゃんの所には行かせないですよお、ダイ・レーゲン・デス・スターン星の雨……！！」

リインフォース……！！

『マスター、シールド間に合いません……！！』

ドッ！ ドッ！ ダンツ！ ガガンツ……！ ドッガンツ……！！

「全弾命中ですう、さっすがリインです、えっへん！」

うんうん、流石ね、油断してくれて嬉しいわ、リインフォース。

「エクスプロージョン」

「え？」

ドッガン！！ と派手な爆発が起こる。

「さて、あとははやてだけね、贄殿、行くわよ」

贄殿を杖から剣に変える、そして、私ははやてのもとへと向かった。

「あゝ、これはあかん、負けや、私は負けを認めるわゝ」

「残念ね、訓練に降参なんてないわよ？ この前はそれに騙されて落としてくれたものね？」

そう、この前は一対一での訓練で降参したふりをして後ろからドカンッとしてくれたのよね、ああ、思い出したらイライラしてきた！！

「それじゃあ、死になさい、タヌキ！」

「ちょ！ それはひどい！ あっ！」

はやてはなにを思ったのか私の後ろを指さす。

「はんっ！ そんな古典的な方法に」

「そして、世界は混沌へと帰る、カオティックボム」

『カオティックボム』

声が聞こえて、後ろを振り向いたときには真っ黒なものが目の前

まで来ていた、くっ！　ここまできて！！　完全に落ちてなかったのね、白亜！！

「はぁ、はぁ……、どうにか勝ちましたか、ふう」

どうにか地上まで降りる、魔力をほとんど使い切ってしまった。

「これでも、私だって日々成長しているんですから、これで、ご主人様との……デート権、は、私の、も……の」

そして、私はその場に崩れ落ちる。

10,000PV記念とある日の

をかけた訓練光景(後書き)

かけていたのは創とのデート権でした。

家族との亀裂と一生の宝もの

はっ！と目が覚める、昨日創お兄ちゃんに教えてもらった早寝早起きの魔法のおかげだ。

時間は5時、創お兄ちゃんと遊ぶのは7時の約束だから早く髪をとかしたり大変なの。

「あら？ おはよう、なのは、今日は早いのね」

料理をお皿に盛りつけながらそういうお母さん。

「あ、お母さん、おはよう、そうだ」

「ちょうど良かったわ、なのは、お母さんはこれから翠屋にいかないといけないから朝ごはんはこれね、それじゃあいい子でおとなしく待っててね？」

そう言って、お母さんはなのはの頭を撫でて行っちゃったの、髪をとかしてもらおうと思ったのに……

さて、今の時刻は7時20分、なのはと約束したのは7時、あの性格だから遅れるということはないと思ってたんだけど、どうかしたのかな？

迎えに行くべきかと考えていると公園の入口になのはが現れた。

「おはよう、なのは」

どうやら今日は髪を結んでいないようだ。

「お、おはようなの、待たせてごめんなさい！　それで、それで…
…」

「大丈夫だよなのは、ゆっくりでいいよ、どうしたのかな？」

なのはをベンチに座らせ聞く。

嫌われたり、迷惑をかけないようにしてきた、なのはに遅刻は大事件なのだろう。

なのはから聞いた話は朝の5時には魔法で起きたのだが髪をとかしたり結ぶのに挑戦していたらこんな時間になっていたと泣きながら教えてくれた。

「そつか、そつか、泣かなくていいよなのは、俺はなのはの事をそんな事で嫌いになんかならないから、おいでなのは」

「ふえ！？」

俺はなのはを膝の上に抱っこする、そして、手の中に櫛を創りなのはの髪を優しくとかす。

創お兄ちゃんがなのはの髪を優しくとかしてくれます。

なのははこの時間がずっと続けばいいと思ったの、でもそれも10分くらいで終わっちゃった。

「なのは、手を出して」

創お兄ちゃんに言われて私は手を出すの、手のひらに載せられたのは黒いビー玉みたいなものだった。

「プレゼントだよ、なのは、それがなのはのデバイス、アディクションハートだ」

「アディクション、ハート？」

なのはのデバイス、創お兄ちゃんからのプレゼント。

「そうだよ、なのはのための魔法の杖、それから、これもあげよう」

そう言って渡されたのは、黒い金色の模様が入った、櫛だ。

「その櫛には魔法がかかっていてアディクションハートを使えば自分で髪をとかしてくれる、動作はさっきの俺の動作が入っているからな」

嬉しいの、とっても嬉しいの、どちらともなのはの一生の宝ものにするの！

「それじゃあ、デバイスがあれば色々なことができるから一緒にがんばろうか？」

そう言って、頭を撫でてくれる創お兄ちゃん、こっぴどいて、なのはの魔法の修行が始まった。

ロリコン疑惑と良い感じの雰囲気

さて、日曜日にはなにに付き合っ、魔法の修行をした。
今日は月曜日面倒な学校があるので通学路を歩いている。

「創、おはよう!」

そう言っ、俺の手を握るのは、月村 忍だ。

「おはよう、忍」

「うん、えへへ、ん?」

俺が挨拶を返すと、うでに抱きついて頬を緩めたかと思うと、次はなんだか暗い顔になった。

「どうした、忍?」

「え? あ、あのね、昨日はなにしてたの?」

「魔法の修行だけど?」

なんでこんな事聞くんだろう?

「そっか、それって一人で?」

「いや、違っぞ、実は弟子が出来てな、その子と一緒にやったぞ?」

忍には魔法のことを話してある、まあ、そのほうが色々便利だ

からだ、マッドだから面白いもの開発したりするし。

「ふん、ごめんなさい、変なこと聞いて」

そう謝ってくる忍、その後はいつもどおりだった。

今は昼休み、屋上でお弁当を食べながら創と話をする。

ああ、今度はメスガキか、ゴミクズにメス豚にメス犬、ああ、鬱陶しい創に近づく全てを してやりたい。

でも、そんな事をすれば私は捨てられるだろう、そんなの嫌だ、もう一人は嫌だから。

私は、私のできることで創を助けていく、例えばこの海鳴市の裏表についてのサポートは私の担当だ。

「そつえば、忍、お前のすずかちゃんも5歳だったよな？ なのはと一緒に修行させるか？」

「それは……、そつね、あの子、幼稚園に通ってるんだけど最近うまく手加減できずに友達を傷つけちゃって自分の力を嫌っててね、そついうわけをお願いするわ、創」

これで、すずかが創に近づく可能性は高くなる、でも、一人より二人、すずかが創に近づけば姉妹ど……げふん、げふん、まあ、創もそついうことが好きだから周りよりリードできる。

よつしゃああああああ、きたよ！ すずかちゃんだよ！ テンシヨンが上がるね！！

あんな物静かな子が戦う姿はいいと思うんだ！ 特に馬鹿でかい

大剣を使って戦って、うふふ、とか笑ってたらずげえいいと思う。

「機嫌がいいわね、創」

「うん？ そう見える？ まあ、そんな事はどうでもいいじゃん、それにしても料理うまくなったな忍」

「え？ そ、そう？ だ、だったら嬉しいな、って、そうじゃなくてすずかをお願いするって言ったたらそんなに機嫌良くなって、もしかして、創ってロリコン？」

ロリコンｗｗｗｗ

そんな事ないぞｗｗｗｗただ可愛いが正義なだけだｗｗｗｗ

「ロリコンとはひどいな忍、もしそうだとしたら俺は忍と付き合っていないぞ？」

「ん、確かに、でも、ああ、そういう事ね、可愛ければなんでもいいんでしょう？」

おお！ 気づいたか！ まあ、いつも公言してるからな。

「かわいいは正義だぞ」

「うん、それは分かった、けどちゃんと私も見てね？ じゃないと……ね？」

目のハイライトが消えていますｗｗｗｗ怖いｗｗｗｗ

「言ったはずだぞ、忍、お前が自分を見て欲しいって言うなら俺は

お前自身を見てやるってな」

「あつ、そうだよな、創は約束してくれたもんね、たしかあの時は自分の殻に閉じこもっている怯えた少女が出てくるまで見守ってやるだったっけ？」

ハイライトが元に戻った、これで刺される可能性はなくなったな、それにしても昔の自分かなり恥ずかしいこと言ってるなwwww

「今は、殻から出てきて初めて見た悪い男を追いかけるいい女だな」

うまい事言ったかもしれない俺wwww

「くすくす、そうだね、でもね、悪い男でも私にとつてはとっても大切な人なんだよ？ だって私が殻を破るまでずっと私のことを見守ってくれた人だから」

ぐはっ！！ 駄目だ、なんだこの良い感じの雰囲気は！？

「もうこの話は終わりな、もうすぐ昼休みも終わるし、教室に戻るぞ！」

「うん！」

すずかちゃんゲットｗｗｗｗ

放課後、やっと学校が終わった。

(なのは、聞こえるか?)

俺はなのはに念話を送る。

(ふえ!? そ、創お兄ちゃん!?)

(そうだ、それで用件なんだが今日の練習は昨日言ったとおりやるが、少し行くのが遅くなる、分かったか?)

これからすずかちゃんを迎えに行くのだ。

(わかったの、創お兄ちゃんが来るまで自主練習してるの)

(おう、分かった、無理するなよ)

(わかってるの)

「それじゃあ、忍、行くか」

なのはとの念話を切り、忍にそう言って、忍の家に向かう。

「うん」

そう返事して、忍は俺の後ろについてきた。

お姉ちゃんの恋人が家にきた。
今までも何度かうちにきたことがあった。

「こんにちは、すずかちゃん」

「は、はい、こんにちは、創さん」

少しだけ緊張する、この人は私のことをどう思っているのだろうか？ お姉ちゃんはどちらかと言えば戦闘面より知能面に才能が特化して人だ。

私はその反対で知能面より戦闘面のほうが特化している、この人はお姉ちゃんを受け入れたが私はどうだろうか？

幼稚園で友達に怪我をさせてしまった、私の力は異常で人を傷つける力、それをどう思うだろうか？

「あの」

「うん？ なんだい？」

だから、少しだけ試すことにした。

「手、手を貸してください」

「手？ えっと、はい、どうぞ」

創さんは少し戸惑ったようだけど手をこちらに差し出してくれた。私はその手をおもいきり握り締める、私が本気になれば普通の人間の手などぐちゃぐちゃになる。

「えっ!？」

本来ならぐちゃぐちゃになっているだろう。創さんの手はなんともない

「うん？ ああ、そういう事か」

そう言って、創さんは私の頭を撫でる。

「友達を傷つけちゃったんだってね、試したくなつたのかな？ 不安だったんだな」

更にそう言って、いい子、いい子と言って私の頭を撫でる。

「大丈夫だよ、俺は君を受け入れてあげる、それに、そんなに不安ならその力を制御する方法を教えてあげるよ」

「出来るの？」

「出来るよ、簡単だ俺についておいで。すずかちゃん」

創さんは私を受け入れてくれるといった、力の制御も出来るというなら私は創さんについていこう。

すずかちゃんゲットwwww

少し読心系の能力使ったけど手を出してとかなにを狙ってたのかわかんなかったしな。

使って正解だったぜ、さて、それじゃあ今日はなのはとすずかちゃんと訓練して終わりだな。

原作？ 開始（前書き）

原作まで一気に飛びました。

機会があれば原作までの間にあったことを番外編として書きたいと思います。

原作？ 開始

あつという間に4年が過ぎた、ついに原作開始の日になりました

WWW

それというのも魔力を持った物体が空から降ってきたからだ、それにユーノからの念話もあったからな。

「さてさて、原作はどのように変わるんだろうな？ クッククック」

「将来か、あむ、うむ、私は創お兄ちゃんのお嫁さんかな、すずかちゃんとアリサちゃんは？」

私はタコさんウインナーを食べて聞く。

「うちは、お父さんもお母さんも会社経営だし家を継がなきゃぐらいだけど？」

「私はお姉ちゃんのように創さんのサポートをしたいなと思ってるけど」

やっぱりすずかちゃんはそうなんだね。

「そういえば、今日の夢なんだけど、念話があったよね？」

「ああ、あれね、安眠妨害もいいところだわ」

「確か、ジュエルシードって言ってたよね？」

ジュエルシード、多分ロストロギアかな？ 創お兄ちゃんならな
んか知ってるかも。

「今日は創お兄ちゃんのところに行かない？」

「そうね、創ならなんか知ってるかもしれないものね」

「そうだね、創さんのところ行くなら塾に行くよりよっぽど勉強に
なるしね」

そうやって、創お兄ちゃんの家に行くことが決まったの。

なのはたちが家にきた、あれ？ フェレットもどきは？ 原作は

……うん、今更か……

「それで、どうした？」

「えっと、昨日の夜のことなんだけど」

やっぱり、ジュエルシード関係だよな。

「ああ、あれか、うーん、そうだな、ゲームをしないか？」

「ゲーム、ですか？」

「そうだ、さすが、まあ、ゲームってのは誰が一番ジュエルシード
を集められるか、だな」

もう原作なんてあって無いようなものだが、一応頑張ってみよう。

「へえ、ルールは？ ゲームっていうんだからあるんでしょ？
それに景品もね」

「そうだな、ルールはリミッターで魔力をAAまで抑える、一応成長率はありだから頑張ればリミッターが緩くなる、くらいかな、景品は……なにがいいかね？」

景品は考えてなかったな。

「じゃあ、じゃあ、私は創お兄ちゃんのお嫁さんなの……！」

「わ、私は、恋人に……」

「そうね、それじゃあ、あたしは将来のために会社経営なんかの勉強を教えてほしいわ」

「なのは、さすが、そんな事言っていると忍が参戦してめちやくちやになるぞ、景品は俺が一日、行動に付き合っつてやる権利にする」

まあ、これなら問題ないだろう。

「そうね、あたしはそれで問題ないわ」

そう言っつて、アリサはピンクと緋色の太極図になっているコインを弾く、アリサのデバイスである贄殿だ。

「うーん、私もそれでいいの、はあ、創お兄ちゃんのお嫁さん……」

なのはは、そう言っつて、首から下げている黒いビー玉のようなア

デイクションハートを弄る。

「私もそれでいいです、でも、誰かが死ぬなんて痛ましい事故が起きなければいいですね？」

そう言っつて、手の中に小刀を呼び出す、変幻自在の剣、巳六みろくだ。

「ルールの追加だ、人を直接、間接に関わらず殺したと俺が判断した場合、失格だ、それから白亜」

「はい、ご主人様、ゲームマスターをすればよろしいのですね？」

さすがは、12年一緒にいただけはあるな、俺が言いたいことを分かっている。

「それじゃあ、白亜をゲームマスターにゲームを開始する、なにか問題があれば白亜に聞くこと」

そして、ゲームが始まる。

ユーノよ！ さよならまた会う日まで（前書き）

ユーノが好きな人、注意！

この世からさよならします。

ユーノよ！ さよならまた会う日まで

創お兄ちゃん発案のゲームが始まった。

ゲームにするってことはジュエルシード自体は創お兄ちゃんにとって特に価値がないと思うの。

それじゃあ、創お兄ちゃんの目的はなんだろう？

まあ、今は目の前のことが終わるまで待つておくの。

「くっ！ ぐあああああああ！！」

喋るフェレットがジュエルシードの思念体に食べられて死んだの。見殺しも間接的に殺していることになる可能性があるから、白亜ちゃんに確認したらあれは、自分から挑んでいつているのだから関係ないとのことだった。

「それじゃあ、行くよ、アディクションハート、ジュエルシード、シリアル21、封印」

『はい、マスター、ジュエルシード、シリアル????、封印します』

なんだか、すっごく呆気ないの、ん？ アレは？

「アディクションハートに似てる」

『私の名前はレイジングハートです』

『レイジングハート……マスター、どうやら私のモデルになったデバイスのようです』

ふうん、そうなんだ、どうしようこれ？

「おめでとう御座います、なのは、キーアイテムの入手によりポイント一点贈呈です」

「へ？ キーアイテム？」

「そうです、ご主人様が御決めになったモノがそれとなります、ですが、キーアイテムにもモノや手に入れるタイミング等によってマインスポイントになる可能性があるので気をつけてください」

うーん、創お兄ちゃんが決めたものか、他のロストロギアなんかもポイントになる可能性があるってことかな？

「ちなみに、ジュエルシードの思念体に食べられたユーノ・スクライア、あのフェレットもどきですがキーアイテムとしてポイント2点でした」

「ふええ！？ 助けておけばよかったの」

面白そうだからって、見物にしたのが間違えだったの、あゝあ、もったいないことしたの。

「それでは、なのは、ユーノ・スクライアの所持していたジュエルシード1つに封印したジュエルシード1つ、レイジングハートのポイント1点で合計3点ですね、残りのジュエルシードは19個、頑張りなさい」

「はい、なの」

一日で3点も手に入れたし今日はもう帰るの。

キャラがかぶるから大人の体なんだよ

ユーノがwww

ちよ、マジかよ！ A・sはもう完全に崩壊してたけどまさかここでユーノが死ぬとはwww

白亜も容赦無いな、もうちょっとゲームのルールを詰めとけばよかつたぜ、ユーノは、まあ、色々終わってからだな。

「ご主人様、こちらがレイジングハートです」

俺は白亜が差し出してきた、レイジングハートをつかむ、ふむ、確かに温かい。

『適性がありません、セットアップは出来ません』

「別に变身なんてする気ないからいいぞ、まあ、少しいじらせてもらうかな」

そういつて、俺はレイジングハートを握り締める。

なにが起こつたのかよく分からない、目の前の鏡に写るのは真紅の長髪に金の目、人の形をした体、大きさは大人サイズのようにだ。

「これ、は？」

「うん、うまくいったな、単体完成型自立デバイス、それが今の前の状態だ、レイジングハート」

そういうのは、マイスター？ どうやら少しだけ設定をいじられているようだ。

「単体完成型自立デバイス？」

「そう、そのままの意味で単体で完成している、自立したデバイスだ、それじゃあ、白亜」

「はい、レイジングハート来なさい」

そして、私は白亜様についていく。

私は、レイジングハートを衣装部屋に案内し服を着せました、ちなみにレイジングハートが選んだのは紅のスーツでした。

最初は服を着ることに難色を示していましたが、服がご主人様の特殊な魔力で編まれているのでバリアジャケットのようなものだといったら納得して着ていました。

「それでは、これからあなたの姉妹となる者たちを紹介します、仲良くしなさい」

「はい、分かりました」

そして私は、ヴォルケンリッターの待つ部屋にレイジングハートを連れていきました。

「何だそいつ？」

白亜様に案内され姉妹になるという方々がいる部屋に入ると、そんな事を言われた。

「ふっ」

「ん？ 今お前、あたしを見て鼻で笑わなかったか？」

おや？ バレてしまいましたか、まあ、スペック的にも体的にも私のほうが優っているのに姉だからといって敬う気はないですが。

「そんな事ありませんよ」

「はあ、お前、スペック的に上回ってるからって調子に乗ってるだろ？ とりあえず模擬戦室行くぞ、ついて来い」

「オヤオヤ、怖いですね」

何がしたいんでしょうか？ 理解不能ですね、スペック的に私に勝てる確率などないのに、それともそんな事も分からないほどののでしょうか我が姉は。

あたしは新しく出来た妹、レイジングハートを連れて模擬戦室にきた。

いまいち妹らしくないが特にあのご立派な体だあたしよりデカイ妹ってなんだよ、後でそのへんをあそこに居る創に聞いたただせねえとな。

まあ、今は生まれたばかりでよく分かってない妹を躡けるか。

「それでは両者、準備してください」

レイジングハートはマントだけを出現させたようだ、まあ、あのスーツはバリアジャケットのようなものだから問題ないだろ。

「お姉様、セットアップなさらないのですか？」

「お前程度に必要なない」

そう、必要ない、バカ妹にスペックが全てじゃないって教えてやるためのだから。

「はあ、負けた時にセットアップしていなかったからと言いつい訳しないてくださいね」

「両者準備が整ったようなので、それでは」

戦闘開始、とその声と共にまっすぐこちらに突っ込んでくるレイジングハート、あたしはタイミングを合わせ半回転して一歩下がりを足を出す。

「なっ！」

まっすぐ突っ込んできたレイジングハートはあたしの足に引っかかって、かなりのスピードが出ていたのだろう、すごい勢いで転がっていった。

「くっ！ なれない体なんか使うのではありませんでした、魔法でいかせて頂きます！」

「スファイア！」

上空にたくさんの誘導操作魔力弾が生成される、100個くらいか？

「ファイア！」

レイジングハートの号令で100個ぐらいの誘導操作魔力弾があたしに迫ってくる。

「単調すぎるぞ、こんなんじゃない」

あたしはレイジングハートへ歩いて近づいていく

「誘導操作魔力弾の動きが機械的すぎるぞ、だから、少し予測値をずらされることで当てられない」

レイジングハートの目の前まで行きそういう。

「まだっ」

「これで終わりだ」

あたしはレイジングハートが動くより早くレイジングハートのみぞおちを殴る。

「そんなものバリアジャケットを着ている　っ！！　ぐはっ！」

レイジングハートは血を吐き出し片膝を付く、まあ、いわゆる鎧徹しってやつだな。

「いいか、レイジングハート、あたしたちはプログラム体だが、創
の力で努力すれば成長できるようになる
成長するのはバカにできないんだ今回のように相手がスペック的
に優っていても努力して成長すれば勝てるんだからな」

「せ、い……長？」

「そうだ、成長だ、あたしはレイジングハート、お前のお姉ちゃん
だ、だからあたしはスペックが高いからって天狗になってるお前に
そんなんじゃないダメだって、そんなんじゃない大切なものを守れないって
事を知って欲しいんだ

あたしは、昔、成長の能力なんかいらなれと思ってた、このスペ
ックでもほとんど敵なんて居ないからな、調子にのって天狗になっ
てた、それで、一度勝ったことのある格下に負けたんだ」

レイジングハートは沈黙している。

「そのせいで創の計画に少し支障がでた、まあ、あいつにとって
は少し高い程度の授業料だとか言ってたがな

あたしはなんで負けたのか創に問いただした、それで返ってきた
答えは

「あの騎士はたぶんお前が来ることが分かっていた、それでもって
お前を倒すために努力して成長して勝ったんだろ、まあ、勉強にな
ったたるヴィータ」

だぜ、まあ、勉強になりすぎて、涙がとまんなかったぜ」

それでもって、あいつが見てる前じゃあ、もうゼッター誰にも負
けねーって心のなかで誓ったんだ。

「勉強、になりました、お姉様……私も、お姉様みたいに、強く、なれるでしょうか？」

「お前が強くなりたいって言うなら、特別にお姉ちゃんである、あたしが強くしてやるよ」

「ありがとうございます、お姉様」

そう言って、レイジングハートは気絶した、はあ、仕方のない妹だな、あたしはレイジングハートを背負って模擬戦室を出た。

序盤なので巻いていきます(前書き)

かなり短いです。

序盤なので巻いていきます

「うん？ この感じは……」

ジュエルシードね。

「贄殿、ターゲティングしなさい、昨日はなのはに取られたし今日は私が貰うわよ」

『もうターゲティングしてる、これで邪魔されることはない』

さすが贄殿、さて、場所は神社ね。

『ジュエルシード??封印』

「呆気なさ過ぎよ、にしても、どんな願いがあったらあんなに可愛い犬があんなになんのよ!」

『知らない、クリエイターは願いを歪めて叶えることに定評があるって言ってた』

「はあ、なんにしてもこれで1点目ね」

「さて、プールで一つ、学校で一つで3点目、呆気無く封印できるけど、搜索魔法の範囲が結構狭いから面倒よね」

すずかは家の近くにあった、ジュエルシード一つで1点、なのは

は、あたしと同じ3点か、本来なら1日で終わりそうなものをこんなに時間をかけなきゃなんないなんてめんどくさすぎよ!!

『仕方ない、これはゲーム、クリエイターの遊び』

分かってるわよ、はあ、贅殿はいつも冷静ね、まあ、だからこそ私との相性がいいたけど。

「まあ、いいわ、これでなのはと並んだしちょっとずつ探していけばいいでしょうっ」

原作前の話

「ファクター」

「は、はい、ご主人様、何でしょうか？」

どこかおっとりとしたような雰囲気をまとった、メイド服を着た女性が現れる。

「うん、頼みたいことがあるんだよ」

「頼みたいこと？ ですか、何でしょうか？」

そう聞いてくるファクターに俺はひとつの情報末端装置を投げる。

「これは？」

「その中に情報がいってる女の子を引き取るんだけど、母親役をしてほしんだよ」

「八神 はやて、夜天の書に高い適正ありですか」

そう、八神 はやて、原作では闇の書事件の中心人物だ、この世界では3歳の頃に自動車事故で両親を失い、自身も下半身不随という障害を負っている。

「その子を夜天の書のセカンドマスターとして登録する、連れて行

くのはアルスマグナだけでヴォルケンリッターは連れて行かない」

「はい、私は問題ありません」

ふむふむ、すべては楽しい楽しいゲーム暇つぶしのために、だな。

私は院長先生に呼ばれて、ある部屋におる、どうやら、私を引き取りたい、いう人がおるみたいや。

「失礼します」

「ん、お邪魔する」

入ってきたのは2人、一人はとてもやさしそうな金の髪を腰まで伸ばした女性、もう一人は高校生ぐらいの男の人だった。

「は、はじめまして、八神 はやて、いいいます」

あかん、緊張するわ。

「ええ、はじめまして、私はファクターといいいます、よろしくね、はやてちゃん」

「は、はい、よろしくお願ひします、ファクター、さん？」

「緊張してるのね、まあ、これから話を始めるけどそんな緊張しなくてもいいわよ？ 少し驚くことがあるかもしれないけど」

うっ、緊張しとることはバレバレか、それにしても驚くことって

なんやろ？

「驚くことってのが気になってるようだな、まあ、さっさと本題に入るか」

今まで黙ってた男の人が一冊の本を私に渡した。

「なんですか、これ？」

『マスター認証、セカンドマスターとして登録します』

「おお！　しゃ、喋ったー」

そう言っつて、私は渡された本を投げてしまっ、が、本は投げ出された空中で止まっていた。

「その本は簡単にいえば夜天の書という魔法の本だ、アルスマグナ、出てこい」

『はい、主』

その声と共に長い銀髪と深紅の瞳が印象的な若い女性が現れる。

「へ、は？　な、なんや、どっから!？」

あまりの出来事に私の頭はパンク寸前になってしまっ。

「アルスマグナ」

「はい、分かっています」

「失礼します、セカンドマスター」

そう言って、アルスマグナと呼ばれた女性が私に触れる。

『ユニゾンイン』

その声と共にさっきの銀髪の女性がまた消える。

「さてと、どうだろう？ 足の感覚とか出たはずだけど？」

「え？」

さつきから、全部が急すぎてなにが起こってるかようわからん。

「私の足は……、ん？ なんや……動く？ どうしてや!？」

「まあ、これが魔法だな、はやて、良かったら俺たちの家族にならないか？ その足も治すことが出来る、どうする？」

「ダメですよ、ご主人様、きちんと説明しないとはやてちゃんが困惑してます、はやてちゃん、これからいろいろ説明するからよく聞いてね」

混乱しとった私にそう言って、ファクターさんが説明を始めた。

まず、男の人の名前は神野 創さんという名前で、魔法使い、いや、神様に近いらしい、神様ってそんなすごい人なんか……

それで、そんな人が私のところに来たのは夜天の書と呼ばれる魔法の本、デバイスというらしい、の適正があるからとのこと。

そして、どうせなら、家族を増やそうといい、私を引き取りに来

たらしい、この他にいろいろと説明してもらったけど、今重要な
はこれだけや。

「えっと、いいんですか？ 私が家族になっても」

「ええ、構いません、そのために色々と手続きもしていますし」

「家族になるんなら、ファクターが母親で俺が兄になる今は居ない
けど他にもヴォルケンリッターという守護騎士が4人居る」

い、いきなり大家族やな、でも、すっごく嬉しいわ！ どないし
よ、涙が出そうや。

「家族になりたいです、私をあなた達の家族にしてください」

「おう、それじゃあ、よろしくな、はやて」

「よろしくね、はやてちゃん」

そうして、私に家族が出来た。

ちよつとだけ夜の一族の力

創さんのゲームが始まって今日で1週間、私が手に入れたジュエルシードは1個、なのはちゃんが2個とキーアイテムで1点で合計3点、アリサちゃんは昨日3個目のジュエルシードを封印して3点。

私が一番遅れてる、どうしようこのままじゃ、負けちゃうよ〜

(マスター、ジェルシードの反応がありました、他の二人は気づいてないようですが、マーキングしました)

巴六からそう念話ってきた。

「げっ！ 気づかなかった、なんで贄殿気づいてないのよ！」

「うっ、残念なの、すずかちゃん行ってらっしゃい」

2人は気づかなかったことを残念がっているようだ、まあ、色々と術式を弄って消費を少なくした感知魔法を常に使っていたのは正解だったんだね。

「うん、それじゃあ、行ってくるね、回収したら家にそのまま帰ろうと思うんだけど……」

今日は午後からお姉ちゃんとお出かけなんだよね。

「あ！ あたしもそろそろ帰るわ」

「そっか、今日はみんな午後から用があるんだよね」

「うん、お姉ちゃんとお出かけ」

「パパとお買い物！」

アリサちゃんはパパとお出かけなんだ。

「そうなんだ、月曜日にお話聞かせてね？」

「それじゃあ、もう行くね」

「うん、いってらっしゃい」

「あの2人でいいのかな、巴六？」

『はい、男のほう所持しているようです』

それじゃあ、さっさと終わらせちゃおう。

「巴六、封時結界」

『封時結界』

通常空間から特定の空間を切りとり、時間信号をズラす。

「ん？ なんだこれ？ 人が居ない？」

「ホントだどうなってるとるんだろっ？」

2人は困惑しているようだ。

「すみません」

私は、そう言って話しかける。

「あ、君も」

「え？ どうした」

こちらをみた2人に目をあわせて心理操作を行う。

「ジュエルシード、小さな青い石を持っていますよね、渡してください」

「はい」

抑揚のない声で男の子がポケットからジュエルシードを取り出す。

「巴六」

『はい、ジュエルシード、ナンバー？、封印します』

ふう、これでジュエルシードは2個目、もっとがんばらう。

温泉旅行です 前編

うーむ、どうしよう？ なんだかわからんが高町家の家族旅行に誘われた。

「行かないのですか？ ご主人様？」

「俺が行ってどうするんだよ？」

第一あの家族と話すのは気まずい。

「そうですか、私はなのはに誘われているので行くつもりです
がよろしいですか？」

「うーん」

確か、次のジュエルシードは温泉旅行の時に手に入るんだっけ、
すずかの家での邂逅がないからフェイトとはここで初遭遇させとく
か。

「うん、行ってこい」

「はい」

「創お兄ちゃん！」

「創さん」

「創」

三人娘に名前を呼ばれる。

「創お兄ちゃんも来るの？」

「いや、俺は行かない、白亜の見送りだ」

「やあ、はじめまして、君が創君かよくなのはから話を聞いていたよ」

そう話しかけてくるのは、高町 士郎、なのはの父親だ。

「おい、なんで、お前がここに居るんだ？」

「うーん、なんでって、妹を連れてきただけだよ、えっと、高町君でよかったっけ？ ってなのはちゃんの兄ならそうか」

とりあえず、猫をかぶって話しかける、大学も一緒だが殆ど話さないからな。

「お前、妹なんていたのか？」

「ああ、白亜」

「はい、お兄様、はじめまして、白亜と申します、今日はよろしく願います」

そう言って、俺の前に出て完璧なお辞儀する白亜。

「ははは、そんなに硬くなることはないよ、なのはの友達だったね、よろしく白亜ちゃん」

「はい、「こちらこそよろしくお願いします」

「あらあら、とても可愛い子ね、まるでお人形さんみたい」

ふむ、まあ、問題なさそうだな。

「それでは、白亜をお願いします、それでは」

「あ、はい、任せてください」

その声を聞いて俺は家に帰る、ふあゝあ、白亜も居ないし家でゆっくり寝よう。

「ねえねえ、白亜ちゃん、白亜ちゃんのお兄ちゃんってなんか武術でもやってるの？」

そつたずねてくるのは高町 美由希様、なのはの姉です。

「はい、やっていますよ、美由希様」

「へゝ、やっぱりそうなんだ、どんな事やってるの？」

「我流なので特に決まった名前があるわけではありませんが、お兄様はスキルゼロと呼んでいました、まあ、お兄さま自体は武術と呼ぶのもおこがましい一代限りの限定的技能と言っていました」

道場破りをしていた頃が懐かしいですね。

「スキルゼロ？ それってどんな武術なの？」

「はい、何でも相手の使用した技の瞬間習得と今まで習得してきた技を組み合わせて戦うという複合型の武術です

昔は道場破りなどをして技術を集めていました」

まあ、理不尽なものですな、何年も何十年もかけて習得したものが見られただけで習得されるのですから。

「え？ そんなのありなの？ てか、瞬間習得ってどれぐらいで覚えるの？」

すごく驚いたような表情でそう聞いてくる美由希様。

「見ればすぐに覚えます、お兄様も理不尽なものだと言っていました、本来なら何年も何十年もかけて習得する、秘技ですら一瞬で習得するのですから」

「それは、白亜ちゃんも使えたりするの、しないよね!？」

「使えませんが、先程も言いましたがこれは、一代限りの限定的技能ですから、私に出来ることはお兄様が習得した一部を教えてくださいとことくらいです」

真似できないことはないのでしょうか、全部が全部使える技と
いうわけでもありませんし。

「あ、白亜ちゃんもやっぱやってたんだ、でも、かなり自然体だ

よね、もしかして、白亜ちゃんもすごく強い？」

「さあ、どうでしょう？ 私はお兄様としか戦ったことが無いのでよくわかりません」

「あゝ、白亜ちゃんのお兄ちゃんも自然体で隙がなかったからとても強いと思うんだよね」

私はその言葉を聞いて、やはり、高町家はご主人様が言っていた通り、戦闘種族なのだと思った。

その後も、目的地につくまで様々な話をした。

番外編？ 卓球と呼ばれる超人スポーツ

「白亜ちゃんって温泉は好き？」

なのはがそう聞いてきます。

「はい、好きですよ昔はよく入っていました」

そうです、昔はご主人様の拠点に温泉がありました。が、ご主人様の拠点はみんなで少し出かけている間にどこかに消えてしまったのですよね。

ご主人様は消えてしまった拠点を探して見つけた時に大爆笑していました。

「昔は、って今は違うの？」

「はい、美由希様、昔住んでいたところは近くに温泉があったのですが今住んでいるところにはないので」

そういえば拠点はどうなったのでしょうか？ 気になります、あの時はご主人様は気にしていなかったようなので私も気にしていませんでしたが帰ったらご主人様に聞いてみましょう。

「あ、そうなんだ」

「はい、それにしても広い温泉ですね」

「たしかに」

体を洗いお湯につかります、なのはは美由希様の背中を流します。

温泉から上がり4人で卓球場へと向かいます。

それにしても面白いものがありますね、卓球場へと向かう途中どの使い魔が知りませんがすれ違いました。

まあ、一応ご主人様に報告しておきますが今は気にしないでおきましょう、これはなのは達の問題でもあるわけですから。

「さて、それでは始めましょうまずはすずかとなのは、シードにアリスです、優勝者にはポイント1点です」

「よろしくなの、すずかちゃん」

「うん、よろしくなのはちゃん」

どちらからも気迫がにじみ出ています。

「それでは、サーブ、なのはからどうぞ」

「それじゃあ、いくの！ はっ！」

なのはは、力加減をあやまったのかボールを爆散させます。

御神流を学んでいるとはいえありえない力ですね、まあすずかも本気になればこのくらい出来るでしょうが。

「ふえ？ ちょっと失敗しちゃったの」

「では、すずかに1点、サーブは2点交代なので次は気をつけなさ

いなのは」

そう言っ、私はなのはに新しいボールを渡します。

「にははは、気をつけるの」

なのははそう言っ、今度は魔力でボールを覆い、打ち出しました。

ボールは卓球台を陥没させシユルシユルと回転しています……ふむ。

「なのはに1点、サーブ交代です」

「え？ ええ！？ 今のアリなの？ いくら何でもひどすぎるよ白亜ちゃん！」

すずかから抗議の声が聞こえます。

「いいですか、すずかこれは卓球という皮をかぶった何かなのです、視覚をリンクさせているご主人様がOKといたったのです、頑張りなさい」

報告ついでにリンクさせたのですがご主人様も楽しまれているよ
うで、私も満足です。

「分かったよ、白亜ちゃん、わたし頑張る！！ いくよ、なのはちゃん！」

すずかもボールに魔力を纏わせてボールを打ち出す。

「ふふふ、甘いねずかちゃん」

ボールは卓球台に陥没するかと思われたが陥没せずに跳ねる、どうやら卓球台に魔力を纏わせているようです。

「はっ！」

なのはは、ボールを打ち返す。
そこからは、ラリーの応酬だ。

「ねえ、白亜、これって卓球なの？」

疲れたようにそう聞いてくるアリサ。

「そうですね、卓球と呼ばれる超人スポーツですね」

おおよそ、普通ではでないであろうドンッ！とかバンッ！など衝撃波を発生させながらするのですからその説明で問題ないですよ。

「白亜、あたしは棄権させてもらおうわ」

「賢い判断だと思います」

それにしても、決着がつきませんね。

「なのはちゃん、そろそろ決着をつけようと思っの、それでね、さよならなのはちゃん」

さすがが、その言葉と共にボールを打ち返し、ラケットを手放す、

ラケットはなのはに向かって一直線に飛んでいく。

「ふええ!!! きゃっ!!!」

ドツゴンツッ! とありえない音がしてラケットはなのはの頭にあたり爆散しました。

なのはは………気絶しているようですね、ギリギリでプロテクションを発動したようです。

「勝者、すずか」

「やったー!!!」

すずかは勝利にうち震えています。

「もうなにも言わないわ」

そうして、卓球と呼ばれる超人スポーツは終了したのでした。

温泉旅行です 後編

「ふう、そろそろいい時間ですね、寝ましょうか」

「そうだね、そろそろ寝よう」

「うん」

「そうね、あたしももう眠いわ」

「ご主人様も夜更かしはダメだと言っていましたし、それではお休みなさい。」

目が覚めました、この反応はジュエルシードですか、他の3人も起きています。

「どうする、誰が行くの?」

「みんなで行きましょう、少々気になることがありますし」

「白亜の気になること? それってなによ」

「まあ、今はいいでしょう、早く行きますよ」

私はそうせかし、ジュエルシードが発動した場所に向かう。

「うっはー、すごいねこりゃあ、これがロストロギアのパワーって

やつ?」

私の使い魔であるアルフがそういう。

「ずいぶん不完全で不安定な状態だけどね」

「あなたのお母さんはなんであんなもの欲しがるんだろうね?」

理由はわからないけど、でも

「母さんが欲しがってるんだから、手に入れないと……バルディツ
シュ、起きて」

『了解、シーリングフォームで起動します』

「封印するよ、アルフ、サポートして」

そして、眩いばかりの光の柱が立つ。

「1つ目」

「あれは!」

「ジュエルシードの封印? でも誰が? 私達以外にも誰かいたの
かな?」

でも、私たちは他の魔法使いに会ったことないの、創お兄ちゃん
からもなにも聞いてないし……。

「あーらあら、驚いたわ、他にも魔導師がいたとわね」

私達も驚いている、そこにいたのはデバイスを持った黒い少女と派手なお姉さんだった。

「あの、あなた達は何者ですか？ ジュエルシードをなんで集めてるんですか？」

「さあねえ、答える理由が見当たらないよ？ ふふふ」

なっ！ お姉さんが狼になったの！？

『マスター、どうやら使い魔のようです』

「へへ、アレが使い魔ってやつなんだ」

知識としては知ってたけど、初めて見たの。

「そうさあ、あたしはこの子に作ってもらった魔法生命、製作者の魔力で生きる代わり、命と力のすべてを掛けて守ってあげるんだ、先に帰っててすぐに追いつくから」

「うん、無茶しないでね」

「オーケー」

「羨のなっていない犬ね？ いくわよ贄殿！ せいっ！！
すずか、なのは、その黒い子にあんた達に任せた」

アリサちゃんは黒い子の使い魔を吹き飛ばす、吹き飛ばされた使

い魔のお姉さんは水切りの要領で水の上を跳ねていく。

「アルフ!!」

「行かせないの、どうしてジュエルシードを集めてるかお話してもらうの!」

「あなたには関係ない、あなたも同じ目的なら、私たちはジュエルシードをかけて戦う敵同士ということになるだけ」

「だから、そういう事を簡単に決めつけないために話し合って、必要なんだと思う」

創お兄ちゃんも話し合いは大切っていったの。

「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ、きっと何も変わらない……伝わらない!」

「あつ」

早い! 後ろに回り込まれた。

『フライアーフィン』

「でも、だからって!」

「かけて! それぞれのジュエルシードを1つずつ」

『フォトンランサー』

「二人で行っちゃった、なんか2人だけで理解しあって置いてけぼりくらっちゃた」

「そうですね、それにしてもあの黒い魔導師、なかなか強いですね、なのはも善戦していますが勝てないでしょう」

うん、確かにリミッターが付いてたらあの子はちょっと厳しいかな？

「負けましたね、やはりデバイスモードとシューティングモードだけでは厳しかったですか、これがツインソードモードを解禁されていれば別だったのでしょうか」

これは、なのはちゃんがマイナス1点かな、他の勢力がジュエルシードを集めるなんてこれからどうなるのかな？

ああ、拠点？ あれは

「ご主人様ただいま帰りました」

「ん？ ああ、お帰り、温泉はどうだった？」

フェイトとは初邂逅したようだし、これからどうしようかな？

「はい、とつてもよかったですよ、それで温泉で思い出したのが結局拠点はどうなったんですか？」

拠点？ ああ、そういえば教えてなかったな。

「拠点は時間をさかのぼって虚数空間に落ちた、いろんな物をばら撒きながら」

「時間をさかのぼって虚数空間に落ちたって、なにがあったんですか？」

「事故だ、俺が作った道具がいろいろ暴走した結果らしい、ちなみに今じゃあアルハザードって呼ばれているらしいぞー」

まあ、俺も知ったときは大爆笑だったが。

「アルハザード……そういう事でしたか、拠点は落としたままにしておくのですか？」

「必要になれば引き揚げるけど今はいらないだろ」

今のところは拠点が必要になる事態ってのではないと思うけどな。

「そうですね、それからすでに報告していますが黒い魔導師についてなのですが」

「ミッド式の魔法を使う魔導師、名前はフェイト・テストロッサ、ゲームの参加者として認める、景品は願いをひとつかなえてやる、だ」

「それは！……はい、わかりました」

白亜が何か言おうとしたが睨んだら了解した。

「そんな不満そうな顔するな、来い白亜」

「はう、ご主人様」

抱きしめて撫でてやる、そういえば最近構ってやってなかったな。と、そんなことを考えているとノックの音がした、誰だ？

「失礼するぞー」

「失礼します、マイスター」

どうやらヴィータとレイジングハート 長いのでレイと呼んでいる のようだ。

「ん？ どうしたヴィータにレイか、なにかようか？」

「ああ、報告だ報告、はやてのリンカーコアのコピーが終わった、

そんで今は創に言われたとおり健気にユニゾンデバイスを作ってるぞ」

これで、リインフォース・ツヴァイができるな、まあツヴァイじゃないけど。

「それにしても、いつもお前たちは二人一緒だな」

「はい、マイスター、お姉様は私の一番大切な人ですから」

ふむふむ、仲良きことは美しきかな、だな。

「はあ、レイ、お前はよく恥ずかしげもなくそんなことが言えるな、それに普通はあたしじゃなくて創のほうが大切だろ？」

「気にすることじゃないな俺は守ってもらわなくても大丈夫だし二人は存分に仲良くするといい」

「はい、マイスター、ありがとうございます」

精神的な成長も大切なものだ成長することによってさらに人間に近くなる、これもひとつの実験だった、魂は作れないが魂を宿すことのできる器を作ることではできないかという実験だ。

実験は見事に成功、最初のころはかなり微弱ではあったが最近ではかなり安定してきている。

まあ、これによって魂のことについてちょっとだけ理解できたことがある、とうだけが。

「それで、皆どうしてる？」

「ああ、シグナムはよくはやての世話をしてる、ザフィーラは好き勝手に動いてる、シャマルははやての世話とご近所付き合いしてるな」

「だいたい思ったとおりだな、まあ特に気にするところはないか。」

「それじゃあ報告ご苦労、もう帰っていいぞ」

「おう、それじゃあ、あたしは帰るレイ行くぞ」

「はい、お姉様！ マイスターそれでは」

そういって二人は帰っていった。

「八神 はやてですか、私にも何も教えてくださらないのですね」

「知る必要がないからな、まあこれも遊びの一環だ」

知ってたら楽しくないだろ、次のゲームもすでに考えてある。

「はい、分かっています、私に教えてくださらないということは次は私もゲームに参加させるのでしょうか？」

「ん、よく分かってるじゃないか白亜、まあせいぜい俺を楽しませろ」

「はい、ご主人様」

そういって白亜は俺に抱きつく、はあ、久々に構ってやるか。

60,000PV記念 今回は「うっ」

「やっと……ここまで来たね、ティア」

「そうねスバル、でもここからが本番よ」

そう、たくさん犠牲を出してやっとここまで来たあの人を、創さんを助けるためにここまで……。

「二人とも、ここまで来ちゃったんだね？」

「なのは、さん……」

スバルの憧れの人、でも創さんをさらった人。

「魔王なのは」

「あははは、ひどいなあ、魔王だなんて」

魔王なのはは少しいやそうな顔をしてそういう。

「いくわよ、クロスミラージュ、クロスファイヤーシュート！」

『了解、クロスファイアシュート』

空中に複数の魔力スフィアが形成され、すべてが魔王なのはに向かって飛んでいく。

「はあ、アディクションハート、アクセルシューター」

『アクセルシューター』

あたしが撃ったクロスファイアシュートはすべて相殺される。

「マツハキヤリバー」

『はい、相棒行きましょう』

「ん？ まっすぐ突っ込んでくるなんて っ！！」

「はっ！、ディバインツ！！ バスター！！！！」

魔王なのは目の前にいたスバルが消え後ろに現れる。

「くっ！ 幻影かやるね、でもまだまだだよ」

やっぱり化け物のように強い、普通スバルのアレを片手で受け止めるなんてありえないから。

「ファントムツ！ ブレイザー！」

『ファントムブレイザー』

「ディバインバスター」

『ディバインバスター』

なっ！ あたしの攻撃、最大の威力を持つファントムブレイザーが！

「これで終わり、クロスファイア、シュート」

「え？ ひっ」

ドンッ！ と衝撃がきて意識が一瞬飛ぶ。

「ティアー！」

「じつとして、よく見てなさい」

スバルはバインドで縛られているのが見える。

「へ？ な、なのはさん！！」

魔王なのはの前にまた魔力が溜まる、そしてその魔力が
ドンッ！ その衝撃とともに私の意識は失われる。

「ティ、ティアー！！！」

ティアが撃墜された！

「ティアナ・ランスター、撃墜」

「くっ」

私は振り返る、絶対に絶対に許さない！！

「うあああああああ！！！！ 許さない、絶対に許さないぞー」

「！！！」

「これは、機人としての能力！！！」

「はあああああああ！！ デイバイーンッ、バスターー！！」

あたしは距離を一気に詰め、ゼロレンジで一撃を与える。

「くっ！ きゃっ！」

なのはさんのバリアを突きぬけあたしの攻撃がきまる。

「あははは、強くなったねスバル？」

うそ！ ボロボロだけどまだ立ってる！？ あたしは構えをとる。

「ああ、うん、私の負けだよスバル、実は立ってるだけで限界、だから」

「どうして、どうしてこんなことしたんですか？」

創さんをさらって、世界を混乱におとしいれて。

「そっか、まだスバルたちは私が黒幕だと思ってたんだ……」

「それは、どういっ」

「それはどういっことだよ、スバル」

パッチンと指を鳴らす音が聞こえる。

「ふっ、んっ、結構痛かったな、それじゃあスバル第二回戦はじめようか!」

伸びをして、傷がなくなり魔力の回復したなのはさんが笑顔でそういう。

「なっ! え? どうして? だって創さんはさらわれて」

「それは違うよ? スバルこれはね、全部創お兄ちゃんの 計画」

「カアアアットーーー!! オツケーイ!! もう完璧!!!
ティアナ、もう起きてもいいよ」

「あ、終わりですか? お疲れさまですアリシアさん」

そういって、倒れていたはずのティアナが起き上がる。

「はぁ、今回はすっごく疲れたの」

「あははは、なのはさん大丈夫ですか?」

心配そうにスバルがなのはにそう聞く。

「うっん、今回は結構大変だったね、エリー、キャロ今回のことは勉強になったかな?」

「はい、とっっても勉強になりましたフェイトさん」

「僕もとっても勉強になりました！」

ティアナたちがなのはまでたどり着けるようにフェイトを足止めしていた二人が言う。

「次回が最終回だな！」

そう、今回やっていたのは黒幕じつこ。

60,000PV記念 今回は 1つこ(後書き)

黒幕ごっこ最終回をやったほうがいいだろうか、それとも黒幕ごっこ
この最初から書いたほうがいいのか……。
まあ、どちらにしろ一発ネタだから書けるか分からないけど……。

次元震起こらなかつたけど管理局来るよね？

「大体この辺りだと思うんだけど、大まかな位置しか分からないんだ」

「はあ、たしかにこれだけゴミゴミしていると探すのもひとくろうだあね」

「ちょっと乱暴だけど周辺に魔力流を打ち込んで強制発動させるよ」

私はバルディッシュを構えながら言う。

「ああ、待った！ それ、あたしがやる！」

「大丈夫？ 結構疲れるよ？」

「ふん、このあたしをいつたい誰の使い魔だと？」

自信満々にそういうアルフ

「じゃあ、お願い」

「そんじゃー！」

アルフから魔力の奔流が起こる。

「これは、強制発動？ こんな街中で発動させたら創お兄ちゃんがキレそうなの……」

まだ、19時だけど創お兄ちゃんは寝てる時間なの、早寝早起きどころじゃないけどいろいろな世界を回ってるからこんな時間に寝るらしい。

『ターゲットイング完了、広域結界発動させます』

「うん、ありがとアディクションハート、それじゃあセットアップ」

『セットアップ』

青い魔力の柱が立っているのが分かる、あそこにジュエルシールドがあるんだ。

「アディクションハート」

『シーリングモード』

「ジュエルシールド、シリアル14、封印！」

ふう、私のほうが近いの私はアディクションハートをジュエルシールドに向ける。

『ジュエルシールド、シリアル??封印』

「それを、渡せー！！」

『プロテクション』

「フェイトちゃん、なんでフェイトちゃんはジュエルシードを集めるの？ 私がジュエルシードを集める理由は大切な人がたくさん集めたら一日だけと一緒にいてくれるって言ったから」

白いあの子がさういう。

「私は……」

「フェイト！ 答えなくていい！！ やさしくしてくれる人たちのところでぬくぬく甘ったれて暮らしてるようなガキンチョになんか何も教えなくていい！ あたしたちの最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」

そうだね、アルフ、今回はとられちゃったけど次は負けないようにしよう。

「帰ろう、アルフ」

「待つて、この間は自己紹介できなかつたけど……私、なのは、高町なのは！ 私立聖祥大付属小学校三年生！」

少しだけ後ろを振り返ってその姿を見る、次はあなたに負けない！ そう決意して私は家へと転移して帰る。

え？ 五人目の魔法使い！？

『マスター、近くで発動しそうなジュエルシードを感じました、ターゲットイング完了、運がいいですね私たちが一番近くです』

「そっか、分かった行こう、アディクションハート」

今回取り込んだのは木のようだけど、毎回毎回どんな願いなんだろう？

「アクセルシューター」

『アクセルシューター』

む、あれはバリア？ 今までとは少し違う、でもたいしたことない。

バンツ！ バンツ！ どこからか飛んできた魔法弾がバリアに阻まれる、あれは！ フェイトちゃん。

「飛んで、アディクションハート」

『フライアーフィン』

バリアをぶち抜いて魔力ダメージを与える！

「打ち抜いて！」

『ディバインバスター』

デバイスンバスターはバリアに阻まれる、そこにさらにフェイトちゃんの魔法が放たれる。

「おおおおおおおー!!」

ダメージがとおり、ジュエルシードが出現する。

『シーリングモード』

「ジュエルシード、リアル7、封印！」

『デバイスモード』

今回はお話、聞いてくれるかな？

「フェイトちゃん」

「今回は負けないから」

どちらともなくデバイスを構える、そして接近してデバイスを打ち付け合おうと

「ストップだ!!」

したら、私たちの間に光があふれたと思ったたら知らない人がいた。

「ここでの戦闘は危険すぎる、時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！」

「クツクツク、さあ物語も中盤、新しいキャラの登場だな」

さあ、物語は加速する！！ もっともっと俺を楽しませろ、クツクツク、クツハハハ、クツアツハハハ。

え？ え？ 更にもう一人の魔法使い！？

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

時空管理局？

「まずは、二人とも武器を引くんだ、このまま戦闘行為を続けるのなら」

ヒュッ オレンジ色の魔力弾が飛んでくる、それをクロノと名乗った男の子が防ぐ。

「フェイト！ 撤退するよ離れて！」

その声とともにフェイトちゃんはジュエルシールド目指して空を飛ぶ、ジュエルシールドを掴もうとする。

が、クロノ君が放った魔力弾に当たり落ちる。

「フェイト！」

「フェイトちゃん！」

落ちたフェイトちゃんをアルフさんが受け止める。
クロノ君がさらに追撃をかけようとする。

「そこまで」

「え？」

白いワンピースに小さな羽根のついたバリアジャケットをまとった人？ は、白亜ちゃんがどうして！？

「なっ！」

「なんだか分からないけど、にげるよフェイト、しっかり掴まって！」

フェイトちゃんとアルフさんは逃げていった。

「ロストロギア、ジュエルシード回収完了……です、それにしても貴女がいるということは創様もこの世界にいるのですか……です？」

白亜……さん？」

「はい、いますよ、それにしても久しぶりですね、トキナ、それにクロノも5年ぶりですか？」

「ふええ！ 白亜ちゃんの知り合い？」

白亜ちゃんの知り合い？ それにジュエルシードを持つてる眠たげな目をした緑の髪の小さな女の子が言ってた創様って創お兄ちゃんのことだよな？ どういう知り合いなんだろう？

「ええ、まあ、知り合いですね、家族ぐるみでつきあう仲ですよ」

「はあ、お久しぶりです白亜さん、それにしても何で邪魔をしたんですか？」

「ご主人様のゲームです、これで分かりますね？ 一応手紙も預かっています、クライド様見ているのでしよう」

白亜ちゃんがさういうと空間に一瞬で魔法陣が描かれ映像が映し出される。

「ははは、久しぶりだね白亜ちゃん、まあ大体分かったけどとりあえず手紙を送ってくれるかな？」

映し出された映像には男の人が映っていた。

「はい」

白亜ちゃんが転送魔法を使う。

「ふむ、分かった創神の依頼状は確かに受け取ったよ」

「はい……です、今創様から念話がきました私もゲームに参加します……です」

手を上げてさういう緑の髪の子、新しいライバルの登場！？
いったい今の状況はなんなの！？

「なのはも混乱しているようですし、一度全員集めて説明しましよ
うか」

さうして私は現状を説明するためにアリサ、すずかに緊急収集を
かけました。

ミステリアスな男、神野 創

「で、なんであたしたちは集められたの？」

アリサが不機嫌そうな顔で聞いてきます。

「顔合わせ兼現状確認です、で、何が知りたいですか？」

「あのあの、白亜ちゃんあの子たちのこと紹介して」

そういつてなのはが指差すのはトキナとクロノ。

「そうですね、まず緑の髪の眠たげな目をしている子はトキナ・ハラウンといえます、レアスキル創神の神託を持った子ですね

もう一人の黒髪の子はクロノ・ハラウン管理局の執務官です」

なのはたちはとりあえず挨拶をしゃっている。

「あの、レアスキル創神の神託でなんですか？」

さすがが、控えめに聞いてくる。

「レアスキルについては知っていますね、創神の神託とは、ご主人様にかかわるレアスキルです

まあ、できたのは偶然ですがご主人様に直接魔法をかけてもらった者もしくはその子供などに現れるレアスキルですね

内容はそれぞれによりますがご主人様の力によるオーバードライブ、未来予知、創造能力などさまざまです

数はそれなりにいますが強さはまちまちですね、まあ大抵弱い未

来予知……例えば天気予知ができる程度が多いですね」

「それだけじゃない……です、私たちはいつも創様と繋がっています……です」

うつとりしたような顔でそんなことをいうトキナ。

「それ、どういう意味……なの？」

「創神の神託を持っているものは少なからずご主人様から力を引き出します、それゆえにご主人様の存在を感じ取れなければ力が使えないのです、だからこの繋がりの強さもまちまちですが存在するのです」

「巫女のトップは私……です、一番力を授けてもらえて一番つながりが強い……です」

「巫女？」

今回はご主人様について説明することが多いですね。

「巫女というのは創神の神託を持っている者の事です、創神の神託は女性にしか現れないので、まあそこがご主人様らしいですね」

「ふむふむ、俺らしいだろう」

「ご、ご主人様！？」

「創様！ お久しぶりです……！」

目をパツチリと開けてトキナはそういってご主人様に抱きつく。

「おお、久しぶりだなトキナ」

「え？ なにあれ、さっきとぜんぜん違うじゃない？」

アリサがそう聞いてきます。

「ああ、トキナはご主人様がいるといつもあんな感じですよ」

「ふゝ、うん、まあ分かったわ」

成長しましたねアリサ、今までのあなたなら意味が分からないと怒鳴っていたでしょう。

おお、なんか久々のまともな登場のような気がするぞWWW
主演なのにWWW

まあ、今はそんなこと関係ないか。

「それにしても、トキナは相変わらず小さくて可愛いな」

「はづゝ、創様、恥ずかしいです」

「ちょっとそこ！！ なにげに犯罪チックよ！！」

そういってアリサが怒鳴ってくる、確かになんだか犯罪チックだな。

「まあ、気にするなこれでもお前たちと同じ年だから」

「ふええ！ それ本当なの！？ 小学生になったばかりぐらいにしか見えないの！」

「誰が、幼稚園卒業したばかりの子供にしか見えませんか！ 失礼にもほどがありますです！」

まあ、たしかにトキナは小さいからな。

「トキナ、気にするな俺は小さいトキナが好きだぞ」

「はう！？ そ、そうなのですか？ です、な、なら小さくてもいいです、えへへへ」

さてと、トキナを愛でるのはこのくらいにしておくか。

「それでトキナ、本殿のほうはどうしてるんだ？」

ちなみに本殿ってのはいつだったか無人世界に建てた神殿のことだ。

「シーナが管理してますです、今回の仕事は予知が不安定なのと創様に会える予感があったので参加したです」

予知が不安定になったか、常に未来は不確定だがある程度は決まったとおりに行く、不安定になるってことは不確定な要素が多いということだ、こういうことはたまにあるんだよな。

「そっか、まあそれならいいか」

「それから、創様に聞きたいことがあるのですがです」

「うん？ なんだ？」

「自分のことを魔女と呼ぶ女性が神殿に訪ねてきたのですが、あれは何ですか？ です」

少し怒ったような顔でそういうトキナ、何かあったのだろうか？ それにしても、ここであいつが出てくるかもうちよつと後に出てくるかと思った。

「まあ、それについては秘密だ」

「秘密ですかそれじゃあ仕方ないです」

「なによ、秘密って！ なんかいやな予感しかしないわ！ あんた、あたしたちに秘密にしていることまだまだあるんじゃないでしょうね
！！」

トキナは納得してくれたがアリサがキレている、これが最近のキレる子供か、怖いな。

「はあ、秘密が多いほうがかっこいいだろ、こう……ミステリアスで」

「そうですね創様、かっこいいです！！」

「確かになんだかかっこいいの！」

「うん、そうだね」

「うっがー、そうじゃないでしょ！！　なのはもすずかもなに
いってんのよ！！！」

おお、これがうわさのバーニングアリサかすごいな。

「誰がバーニングよ！！　あんたもふざけすぎなのよ！！！」

そういつて、アリサがすごい速度　具体的にはソニックブーム
が出るくらい　で贔殿を投げてきた。

が、贔殿は俺の近くまで飛んでくると見えない壁に阻まれて止ま
った。

あっ！　忘れてたシンプル（笑）な能力があっただった。

「くっ、なによ今のどうして刺さらないのよ！！！」

あー、今は確実に殺しに来てましたね、はあそろそろふざける
のもやめるか。

「アリサ」

真剣な声を出す。

「な、なによ」

「俺の秘密はまだまだあるぜ！　それがミステリアスな男、神野
創だからな！！！」

そして最後に決めポーズをして俺はその場から転移で逃げ出した。
まあ、すべては俺が楽しむためだ許せアリサwwww

100 / 000PV記念 魔女は探している

チリーン チリーン あの方からもらった私の宝物である耳飾から澄んだ音が鳴る。

あの方の魔力を封じ込めた耳飾だ、私があの方の魔力を忘れないためにつけられた耳飾、こんなものがなくても私があの方を忘れる事などないのに。

私はあの方を探している、私はあの方を見つけたいひとつになるのだ。

「この世界にもあの方はいない」

私は廻る廻る、あの方を探して世界を廻り旅をする。

次の世界にたどり着いた、あの方の魔力の残滓を感じる。

あの方がいるかもしれない、そう思っあの方の魔力の残滓を感じた場所に移動した、そこには大きな神殿が建っていた。

「何者ですか？ ……です、ここは創神の神殿貴方のような邪悪な存在が近づいていい場所では……ん？」

神殿に近づこうとしたら緑の髪の毛の眠たげな目をした少女が目前に転移してきた、なにやら途中までしゃべって今は私の耳を見ている。

「私は魔女、ここにあの方はいるのですか？」

「あの方、というのが誰のことか知りませんがもしその耳飾の魔力の持ち主のことを言っているのであればここにはいません……です」

「ここにもあの方はいませんでした、あの方はどこにいらしたのでしょ
う。」

「私は貴女の質問に答えました……です、次はこっちからの質問……
…ですあの方という人にあつてどうするのですか？ ……です」

「ひとつになるのです、ああ、私はあの方を取り込んでひとつにな
るのです、それにしても貴女はとてもいいものを持っていますね？
少しもらっていきます」

「え？ なっ！？ ぐっ！」

ああ、とてもきれいです新緑のリンカーコアたくさん珍しい魔
法、ふふふふ、これでまたあの方をさらに取り込みやすくなった。

「あはっ、とつてもおいしいです、あははは、ええ、とつてもおい
しかったですそれでは私は次の世界へと行かせてもらいます」

「ま、っ、……です……はあはあ、こんなことして、ただで済むと
思っているのか……です」

「思っていますよ？ どうせ貴女は追つてこれません、それに魔力
も胸も身長も女の魅力もない、ないないづくしの貴女など怖くもあ
りませんから、それでは」

貰う物は貰ったのでもうここには用はありませんので私は次の世
界へと移動しました。

世界を渡るときかなり強い殺気を受けましたがあの程度なら、ま
あ許容範囲でしたね。

100、000PV記念 魔女は探している（後書き）

そつえば創はあのドロドロした黒いのはどうしたんですたっけ？
魔女は次はいつ出てくるのでしょうか？

ジュエルシードは今いくつ？

「ご主人様も相変わらずですね。」

「うつがー、あんにやろう！ 絶対に許さないわ！」

「アリサちゃん落ち着いて、いつもの創さんの悪ふざけだよ」

そういつてすずかがアリサを落ち着かせる。

「はあ、話しが進まないじゃないかとりあえず現状を確認させてもらおう」

まず、今回のゲームについて内容はこの世界、地球に落ちてきたジュエルシードの争奪戦、今まで集めているジュエルシードは10個、そのうちの2個はあの黒衣の魔導師が持っている、ここまでに何かありますか？」

「特にありませんね」

フエイト・テストロツサがゲームに参加していることは言わないほうがいいでしょう、ご主人様の楽しみてきに。

「そして、僕たち管理局は監視官をすればいいんですよね？」

やる気のなさそうにクロノがそういう。

「そうです、何か問題がありますか？」

まあ、監視官といってもただ見ているという意味ですからね、時

間の無駄だと思っているのでしょうか。

「いえ、問題ありませんがよかったです。訓練をしたいので影を貸してくれるとうれしいです」

影、ご主人様が作った訓練用の人形、それは使用者と同じもしくは少し高い程度の力を有しているというものだ、使用者と同じか少し高い程度の力を有しているということは全力で挑む必要があるそのため勝っても負けてもかなりの経験になるのだ、かくゆう私も毎日影を使って特訓している。

たぶんなのは達も毎日やっているだろう。

「まあいいでしょう、グノーシス予備の影を」

「はい、マスター」

グノーシスからカードが出現する。

影を入れているカードだ、それをクロノに渡します。

「ありがとうございます」

それをクロノはうれしそうに受け取る、相変わらず真面目ですね。

「さて、こちらにあるジュエルシードは8個、アリサが3個、なのはとすずかが2個、トキナが1個そしてなのはとすずかが+1ポイントずつ、なのはとすずかとアリサがこれで3点、それではトキナがかわいそうなのでトキナに+1ポイントしておきます、これでトキナが2点これが今のポイントの状況です、質問は？」

「ないの」

「ないわね」

「ありません」

「ない……です」

問題はないうつですね、これで現状確認も終わりましたし今日はもう解散ですね。

ジュエルシードは今いくつ？（後書き）

少しスランプ気味……。

貰う……です

時空管理局がきてから10日、ジュエルシードは私、アリサちゃん、すずかちゃんが1つずつ手に入れた。

フェイトちゃん達が2つ、残りのジュエルシードは6つ

「何で見つからないのよ！ 本当にあと6個あるんでしょーね！」

「うーん、あと探してないところっていったら海ぐらいかな？」

確かにあとそこぐらいしか思いつかないの。

「海？ それどうやって見つけるのよ？」

「うん、それが問題なんだよね」

「魔力を打ち込んでもいいんだけど、魔力をたくさん消費するの」

今はリミッターがかかってるし、うーん、どうしたら、ってこの感じは！？」

「これって、あの黒い子の魔力よね？ もしかして海のジュエルシードを強制的に発動させる気？」

「た、大変なの！ とにかく助けに行かないと！」

「なのはー！」

「あははは、いっちゃったねなのはちゃん、私達も行くところアリサちゃん?」

さすがが苦笑いしながらそういった。

「はあ、そうねずか出遅れるわけにはいかないしね」

そういつてあたし達はなのはを追いかけた。

むう、まったくよくやりますね……です。

ターゲットイングとやらはされていないようですし私が貰っても問題ない……です。

おっと、このままでは狼さんにとられてしまう……です。

「じゃまー！　するなー！……！」

む、2つだけですかもう1つ欲しかった……です。

「うっ〜！　うああああああー！……！」

狼さんが手に魔力をためて海に放つ……です

「きゃー！」

くっ！　逃げましたか……です。

はあ、雨が降ってきました……です、今回はもう帰る……です。

は？ 個人情報？ なにそれ？ おいしいの？

「プレシア・テストロッサ？」

「そうです、ご主人様からの情報ですから間違いないですね」

「それが大ボスの名前ってわけね」

でもなんでこんな時に情報を出すのかしら？ まあ、創のことだから気まぐれの可能性が高いんだけど。

「それにしてもすごい量の情報だね、身体情報から魔力情報まで個人情報ってなんだろうね？」

「まあ、ご主人様ですから」

「創お兄ちゃんだから」

それで納得できる自分が怖いわ。

「では、報告会は終わりですあとは各自資料を持って対策を立てるなどしてください」

「それにしてもどれだけ情報があんのよ、ほとんど知らない情報だったりするし、ってこれ！」

これって本当なのかしら？ だとしたらあの黒い子は……。

「どうかなされましたか、アリサお嬢様？」

「なんでもないわ、少し気になったことがあるだけ」

そういつてあたしは窓の外を見る。

「あつ、鮫島！ ちょっととめて」

あたしは車から降りて一瞬だけ見えた姿を確認しに行く。

「やっぱり……」

あの黒い子の使い魔。

「鮫島」

「心得ています」

「ああ、目覚めたの？」

あれ？ 子のちびっ子どこかで？

「あんた頑丈にできてんのね、あんなに怪我してたのに命に別状はないって、まあ今は休みなさい怪我が治るまではあたしが面倒見てあげるわ」

あつ、あの時の。

「あんた、どうして？」

「どうしてって、あたしが助けたかったからよ、それからあたしはアリサよ」

アリサ。

「あたしはアルフだ」

「そう、それじゃあアルフこの部屋は自由に使っていていいからね、あつそれから食事は人用？ 犬用？ どっちがいいかしら」

「犬用で頼むよ、人用の食事は味が濃くてとても食べられたものじゃないからね」

「分かったわ、それじゃあ明日のはやすすかをつれてくるから話し聞かせてね」

そういつてアリサは部屋を出て行った。

ユニーク20、000記念 主人公は人の話しを聞かない

原作9年前のある時に事。

「できた、できた、よしそれじゃあ早速……いでよ神龍！」

すさまじい光が目の中の7つの玉から発生する。

「さあ願いをいえ、どんな願いでもひとつだけかなえてやろう……」

「なっ！ ご、ご主人様！ なんですかこれ！？」

「え？ なにして神龍だよ？」

「やっぱりかっけーな！ さすがだぜ神龍。」

「しえ、神龍？」

「そうそう、7つの玉を集めて呼び出すとどんな願いでもかなえてくれる龍だよ」

さてと、やっぱり最初の願いは。

「ギャルのパンティーおくれ っ……！！！！」

「ご、ご主人様……！！？」

白亜の困惑した声が聞こえる、空からはパンツが一枚落ちてきた。

「願いはかなえてやった、ではさらばだ……」

そういつて神龍は消えて、7つの玉が浮き上がりいろいろな方向に飛んでいった。

「ふあゝ、楽しかった次に使えるのは10年後だなどうなるかな？」

「ご主人様、また新しい遊びですか？」

「うん、そんなところだ、まあ使うか知らないけどな、っと、ん？」

なんだこの感じ？ 俺の力をちょっとだけ持っていつている？
それは前からあったけど、うゝんこれは……。

「どうかしましたか？ ご主人様」

「いや、ちょっと面白いものを見つけた」

「面白いものですか？ それはよかったですね」

一応今から会いに行ったほうがいいだろう、この感じだとまだ生まれたばかりで加減ができないだろうし。

「白亜出かけるぞ」

「はい、ご主人様、どこへ行くのでしょうか？」

「うん、ミッドチルダだ」

転移したのは場所は病院だった。

「えっと、ご主人様どうなっているんですかこれ？」

これは、ご主人様の魔力？ いや、少し違ってもとても近い？

「うんうん、元は俺の魔力だなそれを変換して自分の魔力としてるんだろ」

ご主人様はとても機嫌がいい。

「ハロハロ、おひさだね2年ぶりかな？」

「君は何者かな？」

そういって、部屋の中にいた男性が立ち上がりご主人様を睨みつける。

ご主人様と似た魔力を出す赤ん坊を抱いた女性のほうも警戒しているようだ。

「あつ、そっか、あの時はこれをつけてたんだっけ？」

ご主人様はそういって、仮面を取り出す。

「君は、もしかして指パッチ」

「それ以上言うな、何も言うな指パッチの神様とか言おうとしたんだったらとにかく何も言うな」

まくし立てるようにそういうご主人様。

「とりあえず最近は何神と呼ばれてるし何神とでも呼んでくれ」

「分かったそれでその何神が何の用かな？」

「男性はいまだに警戒を緩めずにそう聞いてくる。」

「うん、用事するのは他でもないその子だ」

「そういつてご主人様が赤ん坊を指さす、あつ、人を指さしてはダメですよご主人様。」

「確かにあの子は少し特殊かもしれないけど見逃してくれると助かな、僕にできることであれば協力しよう」

「ん？　なんか勘違いしてるみたいだね、その子に何か悪いことしようってわけじゃないよただその魔力の源が俺だから少々変な特殊能力みたいなもってるかもしれないし危なそうだったら能力の封印だけでもしておこうかなって思ったただだから」

「男性も女性も困惑しているようだ。」

「あゝ、ほら分かる？　魔力の波長がかなり似てるでしょ、まだその子は加減つてもものが分かってないのかその身に余る力を引き出すうとしてるからその子のためにも封印はしておいたほうがいいと思うんだけど？」

「かなりの魔力を放出させながらそういうご主人様、本来なら魔力の特徴など分からないが強力であればあるほど特徴といったものは分かりやすいので男性も女性も一応は納得したようだ。」

「あつ、ちなみに原因は2年前のあれだな俺の力の影響だな、最近創神の巫女つてのが出てきてんだが主に俺の力の影響を受けた女のみが発現するレアスキルみたいなもんだ、男の場合その子供が女であれば発現したりするみたいだが」

「つまりこの子の力は君の力の一部ということかい？」

「全部が全部そうつてわけじゃないけどその子自身にもそれなりに力あるしまあほとんどつてのは変わらないけど」

「聞いたことあるわ、確か創神の神託というレアスキルと呼ばれている力よね？ けどその力を持つているからつて創神が直接出向いてくるというのは聞いたことがないわね」

「おや、女性のほうが詳しいようですね。」

「ん、それはあれだなその子と俺の相性のよさが最高すぎて変換率がおかしいことになって長年一緒にいる白亜に力を授けるより効率がよすぎてやばいから見に来たんだよ」

「それが事実だとしたら本当に危ないですね。」

「それはどれくらいやばいのかな？」

「うーん、具体的には俺が毛の先ほどの力を貸せば腕の一振りです世界を滅ぼせるくらい？ ちよつと本気になつたら次元世界のほとんどが滅ぼせる、今の状態でこれだから将来的にはもつとすぐくなる」

「男性も女性も唾然としていますね、まあ仕方ないでしょう。」

「まあ、大きすぎる力は災いしか起こさない……」

パチン

「だから、しばらくは封印……帰るぞ白亜」

「はい、ご主人様」

「なっ！ まって」

相変わらずご主人様は人の話を聞く気がありませんね。
さて、あの緑の髪の子は坊はどうか成長するのでしょうかね。

ユニーク20'000記念 主人公は人の話しを聞かない(後書き)

もうすぐで終わります。

具体的にはあと3時間ぐらい。

え？ 急展開？ ソンナコトナイヨ

「ふえ？ アルフさんが？」

「そう、アルフをね昨日怪我していたのを見つけたのよ」

あの傷は多分魔法による傷、それもデバイスを通さず直接魔力による殺傷攻撃の傷かしらね。

「じゃあ、今日はアルフさんの話を聞くのでいいのかな？」

「まあ、それしかないでしょ」

「ただいま、アルフ」

「アルフさんこんにちはなの」

「こんにちはアルフさん」

「ああ、あんた達が今日は話をすればいいんだね」

さてと、どんな話が聞けるのかしらね。

「ただど約束して欲しいフェイトを助けるってあの子は何も悪くないんだよ」

「あたしは別に構わないわ、なのはやすすずかはどつ？」

「私は構わないの！」

「うん、私も構わないかな」

まあ、なのはがあの子にお熱だからね。

(時空管理局、クロノ・ハラオウンだこちらも正直に話してくれれば約束しよう)

時空管理局も問題ないようね。

「それじゃあ話すよ、フェイトの母親、プレシア・テストロッサがすべての始まりなんだ」

(聞く限りではこの話しに嘘や矛盾はないみたいだ)

「どつなるのかな」

(本来なら、プレシア・テストロッサを捕縛する、だが創神から何もないということはこれもゲームの一部とも考えられる、こちらからは下手に手出しができない)

たしかにそうなの、フェイトちゃんのお母さんがキーアイテムだったりしたら逃がせないの。

「まあ、昨日渡された資料の中で時の庭園って場所は分かってんだからぱっとゲームを終わらせればいいじゃない」

(た！ 大変！ 大変！！ 監視していた屋敷内に魔力反応多数！

！)

え！？ え！？

「さて、どういっわけか予定より早くなったプレシアの旅立ち、う
くんどうなってんだろ？」

まあ、俺には関係ないんだけどなそれにしてもジュエルシード全
部そろったしゲーム終了してんだけどな？」

次回は少し強引だけど最終回かな？ まあ、がんばろう。

え？ 急展開？ ソンナコトナイヨ（後書き）

あと1時間ぐらいで終わります。

次回最終回、見逃すなよ！！

設定って大切だよね!!

「ゲホツ！ ゲホツ！ ふう、もう長くないわね たった8個のロス トロギアではアルハザードにたどりつけるか分からないけど、でも もういいわ 終わりにする」

「母さん!？」

母さんが血を吐いた！ アルハザードってなに？

「もうあなたは要らないわ フェイト」

「かあ、さん？」

「せっかくアリシアの記憶をあげたのにそっくりなのは見た目だけ 役立たずでちつとも使えない、私のお人形」

「アリ、シア？」

誰？ いや、私は知っている？ でも、いや！ どうして！

「作り物の命は所詮作り物失ったものの変わりにならないわ、ねえ フェイト、アリシアはもっとやさしく笑ってくれたわ、アリシアは 時々わがままも言ったけどあたしの言うことをとてもよく聞いてくれた、アリシアはいつでもあたしに優しくかった」

私は作り物？ 私はなに？ 私は……私は……。

「フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽者よ!」

私はアリシアの偽者？

「うふふふ、いい事を教えてあげるわフェイト、あなたを作り出してからずっとね私はあなたが……大ッ嫌いだったのよ!!」

わ、たし、は……。

「ああ、もう！ 数が多いのよ!!」

『エキスプロージョン』

アリサちゃんがエキスプロージョンで傀儡兵を爆発させていく。

「うん、確かにこの数は面倒かな」

「すずかちゃんは巳六を大剣に変えて傀儡兵を一刀両断していた、うんさすがすずかちゃんなの。」

「それじゃあ、私が道を開くね！ いくよアディクションハート」

『はい、マスター、スターライトブレイカー』

そして、桃色の閃光が傀儡兵をなぎ払う。

パチン、指を鳴らすだけで時が止まる。

「さて、クライマックスだ……お嬢さん君が優勝者だ、願いを」

「願い？」

目を虚ろにさせたフェイトがそう問いかけてくる。

「そう、君の願い、どうしても叶えたい願いだよ？」

「……私は」

「そうか、その願い叶えようそれじゃあ君は」

母さんは最後まで私に微笑んでくれなかった……。

私が生きていたいと思っただのは母さんに認めて欲しかったからだ、
どんなに足りないといわれてもどんなにひどい事されても……。
だけど、笑って欲しかった……。

あんなにはつきりと捨てられた今でも私母さんにすがり付いてる。

「私の私達のすべては、まだ始まってもない」

このまま終われない、願いを、願いを叶えよう。

今までの自分と変わらないかもしれないけど……前に進もう！！

「フェイトちゃん！！」

見つけたフェイトちゃん！

「うぐっ、ゲホッゲホッ！」

フェイトちゃんのお母さんが咳き込む。

「母さん！」

「目が覚めたのね、消えなさいもうあなたに用はないわ」

「あなたに言いたい事があります、私は……私はアリシア・テストロツサじゃありません、あなたが作ったただの人形なのかもしれないせん」

フェイトちゃん……。

「だけど、私はフェイト・テストロツサはあなたに生み出してもらったあなたの娘です！」

「ふっふっふっふ、あはははは、あっはははは、だからなに？ いまさらあなたを娘と思えというの！」

「あなたが……それを望むのなら……それを望むなら、私は世界中の誰からもどんな出来事からもあなたを守る……私があなたの娘だからじゃない！ あなたが私の母さんだから！！」

フェイトちゃんが手を差し出す。

「くだらないわ！」

「え？」

「ふっふっふ」

「ジュエルシードを発動させようとしているの！？ でも……。」

「一緒に行きましょう……アリシア、今度はもう離れないように」
床が崩れフェイトちゃんのお母さんとアリシアちゃんの入ったポットが虚数空間に落ちていくの。

「ああ、さん、絶対に助けるからお願いしたから……母さんを、
て」

フェイトちゃんはそういつて虚数空間に飛び込む。

「え？ フェイトちゃん!？」

いきなりすぎて間に合わないの！

「さあ、終焉だ……対価は払われた！ なら俺は願いを叶えるだけ、
母さんを救って欲しいと願ったあの少女のために願いを叶えるだけ
だ……」

パツチン、指のなる音が辺りに響く。

「あー、もう！ どうなってんのよ！ 私達は！ 私達は救いに行
つたのに……！」

アリサはそういつて泣いている。

「間に、あわなかったね……」

そしてすずかはとても悲しそうな顔をしている。

「ごめん……なの、私がつと早く助けてたら……」

なのはの落ち込みようもすごい。

「あー、何で俺んちで葬式みたいな雰囲気出して落ち込んでんの？」

なんか分からんが俺の家葬式みたいな雰囲気です。

「あ、あんたは!!! 空気読みなさいよ!!! 私達は!!! えっ？」

「あっ!」

「ふええ〜!? フェイトちゃん!? どうして!?!」

「あっ!」

俺の横に立っていたフェイトは驚いて俺の後ろに隠れて服の裾を握る。

「おお、なんか知らないけど戸籍上異父兄妹のフェイト・T・神野だ」

「お兄ちゃん」

そういつてアリシアがべったりと俺に抱きついてくる。

「あ、こっちがアリシア・T・神野だ、フェイトの姉な」

「あらあら、創大人気ね」

「ふむふむ、お兄さんだからねプレシア母さん」

アリシアに続いて出てきたプレシアに俺はそういう。

「は？ え？」

アリサたちは混乱しているようだ。

「あ、ちなみに設定はプレシア母さんが俺を本当に産んだ母親で育ての親がもう一人いる兄妹もちょっとだけ

ちなみにそっくりさんがいるって設定だ、まあ所詮そっくりさんだ魔力の波長とかぜんぜん違うし本人って特定できない設定だ」

「せ、設定ってなによー！ー！！！！！」

アリサの元気な声が響く、ふむ……これで一応ハッピーエンドか？

設定って大切だね！！（後書き）

はっはははは、これで完結だー！！

ご愛読ありがとうございました！！！！

そして、A・S？ は始まらないよ！！

だってだって、原作が崩壊してほとんど別物だから。

次回、未定……リリカルなのは S・T・T 始まります。

タイトルに意味は特にないけど、これでいきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3378z/>

リリカルなのは 最低なトリッパーの日々

2012年1月6日19時00分発行